

平成20年度地域資源∞全国展開プロジェクト

# 「吉備路ロマンチック街道 ボランティアガイド養成講座」

～講座抄録～



総社吉備路商工会

## はじめに

地域資源 全国展開プロジェクトの活用で今回の吉備路ボランティアガイド養成講座を開催することができました。旧山手村、旧清音村を中心とした地域を古代ロマンあふれる地域として見直し、多くのお客様をお迎えできるようにとの考え方から実施にいたりしました。故郷を愛する気持ちから、あるいはこの吉備路の魅力に魅せられて、自らこの地域を紹介できる立場を目指して、多くの受講生を迎えることができました。吉備路観光ボランティア協会の会員の皆様のように広範囲にいたる吉備路全域をご案内できることはまだまだ適いませんが、国分寺を中心とした地域のポイントのひとつでもご紹介できるようになりたい気持ちから、全6回の講義を受けていただきました。

講師は民俗学者の立石憲利さんを中心に、吉備路観光ボランティアガイド協会の横田清己さん、そして倉敷芸術科学大学観光学科の芦田雅子先生にもご協力をいただきました。それぞれの先生方の得意分野を受講生に丁寧にご教授いただきました。ここに改めて御礼を申し上げます。

本書の前半は講座でご教授いただきました内容を記し、後半は総社市商工観光課が発刊しております「吉備路観光ガイドマニュアル」から抜粋いたしました。

ここに改めてまとめた本書が、吉備路の素晴らしさを伝えていただく人々のお役に立てることができれば幸いです。

黒媛を中心に「ロマンチック街道」として掘り起こした吉備路。交流人口の増大を目指して、より魅力ある地域とするためにも、私たちひとり一人が吉備路を愛し、自慢し、多くのお客様に訴えて行けるようにしていきたいものです。

総社吉備路商工会

会長 吉澤 威人

# 目次

吉備路ボランティアガイド養成講座カリキュラム	1
第1回講座 ガイダンス、ボランティアガイドの心得	2
第2回講座 吉備路概論、おもてなしの心づくり	5
第3回講座 現地実習（ツアー進行の実際と危機管理等）	10
第4回講座 吉備路の古墳群と黒媛伝説	11
第5回講座 吉備路の民話・伝承	13
ガイド参考資料	20
吉備路風土記の丘	17
備中 国分寺	18
備中国分尼寺	18
作山古墳	19
こうもり塚古墳（黒媛塚）	19
造山古墳	20
角力取山（すもうとりやま）古墳	20
福山城址	21
軽部神社	21
資料 吉備路の魅力発見「黒媛サミット」	22
基調講演 立石憲利氏	22
パネルディスカッション	26

## 吉備路ボランティアガイド養成講座

- 第一回 8月23日(土) ガイダンス、ボランティアガイドの心得  
講師;横田清己氏(吉備路観光ボランティアガイド協会)  
10:00~12:00 総社吉備路商工会会議室、備中国分寺
- 第二回 9月13日(土) 吉備路概論、おもてなしの心づくり  
講師;立石憲利氏(岡山民俗学会名誉理事長)  
芦田雅子氏(倉敷芸術科学大学観光学科専任講師)  
10:00~12:00 総社吉備路商工会
- 第三回 10月19日(日) 現地実習(ガイドの接遇、危機管理等の実習)  
講師;横田清己氏  
芦田雅子氏  
9:00~11:00 備中国分寺界限
- 第四回 11月15日(土) 吉備路の古墳群と黒媛伝説  
講師;立石憲利氏  
10:00~12:00 山手公民館
- 第五回 12月13日(土) 吉備路の民話・伝承  
講師;立石憲利氏  
10:00~12:00 総社吉備路商工会
- 第六回 2月 7日(土) 修了式、黒媛サミット聴講  
講師;横田清己氏  
芦田雅子氏  
13:00~13:30 修了式 総社吉備路商工会  
14:00~16:30 黒媛サミット 山手公民館

## 観光ガイド10の心得

お客様に、心開いて楽しんでもらい、  
「吉備路を好きになって！」いい気持ちで帰ってもらうために。

### 1. お客様の立場でしゃべっていますか。

×「教える」

「お客様に語りかける、楽しんでもらう」「お伝えする」

### 2. 「ときめき」などの感動をお客様に与えていますか。

- 五感に働きかけていますか。
- 身体内部の反応に働きかけていますか。
- 目から入ってくる(何があるでしょうか)
  
- 耳から入ってくる(何があるでしょうか)
  
- 鼻から入ってくる(何があるでしょうか)
  
- 口から入ってくる(何があるでしょうか)
  
- 触った感触(手や足、皮膚から入ってくる)(何があるでしょうか)
  
- 想像力

### 3. お客様に強要していませんか。

- 「押し付け型」のガイドをしていませんか
- ボランティアガイドで一番多い「困ったちゃん」は、知識の押し売り
- 急いではダメ。急がば回れ

### 4. 視覚での訴え方は大事です。

- お客様に不快感を与えない身だしなみ
- 清潔感、好印象を与える服装、化粧など「見た目」も絶対に重要！

### 5. 言葉の重要性、大切さを考えて話していますか。

- 「知識があること」と「お伝えすることは」別物
- 自分の言葉でしゃべっていますか

6. 伝えるとき、その気にさせる会話をしていますか。

- 「はい」「そうだね」「そうですね」が続く会話をしよう
- ポジティブな意見をもらうような話し方

7. 「正直に話す」「正確に伝える」ことをしていますか。

8. お客様を「参加」させる工夫をしていますか。

- お客様に問いかけていますか
- お客様に答えさせていますか
- 参加することで話題が生まれる

9. 常に、新たな自分を磨いていますか。

- 好奇心旺盛・向学心・向上心

10. 感謝の気持ちが大事！

- 「話を楽しく聞いてもらってありがとう」
- 「興味深く聞いてもらって嬉しい」
- 相互の信頼関係が生まれれば、言葉に頼らない次のステップのコミュニケーションが生まれる

観光ガイドとは・・・

観光を楽しみに来たお客様に、その地の観光の知識(自然・歴史・文化・食・人などの情報)を伝えることによって、お客様により深くその地を理解して、楽しい旅の印象を持って帰ってもらう。

伝える 教える お客様が満足する お客様を満足させる 楽しむ・気持ちを開いてもらう
---

# 実践で得たガイドのマナー

## 1 ボランティアガイドの心がけ

- ・郷土を愛し、郷土の文化財や遺跡を誇りに思うこと。
- ・自発的な活動であり、継続して行うこと。一時的な行為であってはならない。
- ・無報酬であることを念頭に、見返りを求めたり、また恩着せがましく言わないこと。
- ・自己満足の為に、必要以上に説明の押し売りをしないこと。
- ・アマチュアガイドであることを意識し、あまり知ったふりをしないこと。
- ・案内をさせていただくことに感謝をし、お客様の喜びを自分の喜びとすること。



## 2 ボランティアガイドの知識について

- ・平素より、自分なりに説得のできる知識を研修や資料から習得しておくこと。
- ・相手にわかりやすい歴史の流れや、説明の順序を考えておくこと。
- ・小学生をはじめての人にも、わかりやすい用語や説明の仕方を自分で会得すること。
- ・説明しにくい物件や形の表現などは、絵図や資料を準備しておくことと便利である。
- ・文化財以外に郷土の産業や特売品、また周辺の観光地や交通等の知識も必要である。



## 3 ボランティアガイドの対応について

- ・予約の時間より少し早めに行って待つこと。そのほうが慌てなくて良い。
- ・案内時間や約束の場所、団体名人数、希望事項など、事前に十分確認しておくこと。
- ・案内のコースや時間など、必ずお客様の予定やニーズに合わせて案内すること。
- ・出会いのときは歓迎にふさわしい態度や笑顔で対応すること。
- ・身なりは制服か、カイドらしく、活動のしやすい服装で、必ず名札を付けること。
- ・最初の挨拶や自己紹介は道案内ぐらいしかできませんが、など、控え目に始める。
- ・説明は自分なりの個性を生かして、あまり上品ぶらないこと。
- ・自分の知らないことについては、はっきりと意思表示をして、ごまかさないこと。
- ・年代や年号よりも、今から何年前というような説明がわかりやすい場合もある。
- ・相手の質問や知識も聞き出すような、対話を忘れないこと。
- ・小学生が騒がしい団体は、ほめて静かになるように、誘導する方法が良い。
- ・案内が終わった時の挨拶と、見送りを必ず忘れないこと。



## 第2講座 吉備路概論、おもてなしの心づくり

### •はじめに 何をガイド(案内)するのか

文化財(寺社・古墳など) 観光施設 その他 山・川・草・木 あらゆる全てのもの  
観光であるいは勉強で訪れた人々は、この地のあらゆることに興味を示してくれます。  
住まう私たちにとってつまらないと思うことでも感心し、関心を持ってくださるものです。  
この土地を愛し、この土地の素晴らしさを心で伝えること、そしておいでいただく人々と  
素晴らしい人間関係をつくる気持ちを持って、お客様をもてなしてください。

### 吉備路とは

- <広義> 備前・備中・備後・美作 = 旧吉備国全体を示す
- <狭義> 吉備路風土記の丘自然公園の地域を示す  
\* 参考文献;「吉備路」「総社の散策」(いずれも岡山文庫)



### 吉備路風土記の丘自然公園

1972年指定、岡山県教育委員会の管理となる(吉備路風土記の丘県立自然公園条例)  
総社市南部から岡山市新庄地区までの887haの広域に渡り、中心部は風土記の丘20ha  
(国分寺・国分尼寺・造山古墳・作山古墳・こうもり塚・福山城までの範囲)

### 吉備路自然歩道

1973年、岡山県政100年記念事業のひとつとして制定

総社・岡山市の吉備路を回遊する歩道

国分寺～寺山古墳～角力取山古墳～作山古墳～三輪山古墳～(総社駅)～宝福寺～  
鬼の城～岩屋寺～岩観音～足守侍屋敷～近水園～葦守八幡宮～竜泉寺～稻荷山～  
奥の院～鳴谷川遺跡～(高松城水攻め址)～吉備津彦神社～吉備津神社～造山古墳  
～千足古墳～国分尼寺～こうもり塚～国分寺

### 吉備路自転車道

総社市スポーツセンター～作山古墳～国分寺～こうもり塚～吉備路郷土館～国分尼寺  
～造山古墳～鯉喰神社～惣爪塔跡～吉備津神社～吉備津彦神社～児童会館

### 吉備史跡県立公園自然公園

岡山・総社・倉敷3市域 2400ha を1966年指定

岡山県立自然公園条例 = 自然公園法(国立・国定・県立)に基く

吉備の中山、高松城跡、鬼の城、井山宝福寺、旧山陽道の古墳、神社仏閣、伝説地等

上記のように「吉備路」は様々に指定地として、多くのお客様を迎えるにふさわしい地域として認められています。この地をこの地に住まう私たちがより深く知り、より深く愛した上で、おいでになるお客様にご紹介できるように概要はまとめておきましょう。



1、ボランティアの意義について考える……永く継続するために

郷土を愛する気持ち  
人とのふれあいを楽しむ  
経験によって自分自身を向上させる  
プロとは違う、素人ならではの味

2、人(お客様)に喜んでいただくということ……何をすれば良いかが分かる

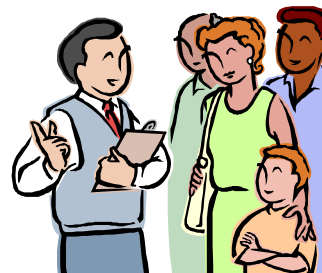
お客様の気持ちを考える  
自身の個性を大切に  
マナーを守り、守っていただく  
より満足し、ご満足いただくために向上心を持つこと

3、その日の活動を振り返る……自身の喜びのために

客観的に一日を振り返る  
次回に繋がるように努力する

4、仲間と協力する……ボランティアの意識を広げて行く

ガイドの友人をつくる  
知識見聞を広げる  
共に活動する喜びを得る



観光産業において「おもてなしの心」というものが大変クローズアップされてきました。

「おもてなしの心」でお客様をお迎えする…。おもてなしの心とは何か、おもてなしとは何か。一般的に接待とか接遇、あるいは饗応などという言葉で表現されますが、要は「いらっしゃいませ」、「ようこそ」と言う気持ちをいかに伝えるかということ。そして、その気持ちを持つことから始まるものでしょう。

「私たちの愛するこの土地にようこそおいでになりました、どうぞごゆっくりお寛ぎいただき、私たちの「宝」をしっかりとご堪能ください。拙い案内ではございますが、お聞きいただけますでしょうか。」というスタンスでの心を表してゆくことが、ボランティアガイドの心とも言えるでしょう。ここでいう「宝」こそが観光の語源にある「光」そのものです。観光は儒教の主要テキスト5つの筆頭とされる易経の「国の光を観る。用て王の寶たるに利し」との一節から来ていると言われます。国の光。つまりその土地土地の「宝」、自慢したいものを観る、観ていただくことです。私たち自身がこの自慢したいものを再び認識し、これを観て欲しいと思うことを強くしなくてはいけないでしょう。吉備路の宝は数限りなくあります。国分寺や古墳などのように目に見えるものもあれば、黒媛伝説のような伝承や、この土地でとれる特産品や風景や草木にいたるまでもが私たちの自慢でしょう。こんなものかと思うものが、お客様にはとても新鮮に映るものです。吉備路を自慢する気持ちをもっと持つことから始めましょう。

### あいさつと旅行者の安全確保等

お客様をご案内するにあたって、最も大切なのは人と人のふれあい、信頼関係をお互いに築こうという気持ちを大切に、実践することでしょう。そのためにはお客さまをもてなす側である私たちから心を開き、より良い人間関係を構築していこうという姿勢やことばが必要でしょう。

**あいさつ** 人間関係においてあいさつは基本中の基本。まず、初対面のあいさつをきちんと実践しましょう。

例;おはようございます。本日は私どもの自慢の吉備路へようこそおいでくださいました。短い時間ではございますが、これからご案内をさせていただきます、ボランティアガイドの と申します。どうぞよろしくお願いいたします……。

ガイドを始めるに当たっては、お客様や自身の安全確保について、環境保全への協力を求めることも必要です。

**安全確保** バス、乗用車等でおいでの場合、駐車場での案内開始になりますが、その場内において他の車との接触事故等を防ぐためのひとこと、また、横断歩道での誘導についての協力を求める一言は大切です。団体の場合は添乗員や幹事に安全確保に対する協力を要請しておくことが重要でしょう。

駐車場内での注意 横断歩道での注意  
貴重品の取り扱い 高齢者・幼児児童への配慮など

**環境保全** 観光地の環境美化への協力依頼も大切です。愛煙家の皆様には禁煙箇所をきちんとお伝えし、喫煙可能場所をお示しすることが必要でしょう。また、ゴミの持ち帰りをお願いし、ポイ捨てを含むゴミ問題について問題意識を持っていただきましょう。

**テクニク** 限られた時間の中でいかに楽しんでいただき、有意義な時間であるように図らうかはガイドの裁量にかかっています。お客様によって特性が違いますので、10人10色、場合によっては1人10色のイメージで状況によってご案内の仕方を変えなくてはならないことをおさえておきましょう。

団体旅行と個人・グループの違い(時間配分、スケジュール調整、目的)  
写真撮影のポイントのおしらせや撮影協力など  
お客様の年齢や構成によって案内の強弱をつける

**PR** せっかくおいでになったお客様です。再び三度の来訪のお願い、ご家族・お仲間をお誘いいただけるようにお別れの際にはごあいさつをしましょう。また、この土地の特産品の購入のお願いや、次回までの宿題をいただく(例;五重塔の建築様式について詳しく調べて…など)ことも人間関係をつなげていく大切な要素です。ガイドそのものが「宝」となることがあります。指名をいただけるように努めましょう。

## 第4講座 吉備路の古墳群と黒媛伝説

### 吉備路の古墳群

「時空を超えたロマン」として風土記の丘、古墳群、鬼の城が3点セットとなりつつあります。吉備路の魅力を求めて来られる方々は「学習」観光が圧倒的に多いと言われます。一般観光客との差別化が必要です。

吉備路の古墳は畿内にあるものと比較されても遜色ない規模、技術が見られ大変重要なもの  
宮山古墳群(スポーツセンター南側) 弥生時代末期(BC4～AD3三世紀頃)

ストーンサークルや集団墳墓……富の集中が始まった時代を示す

お供え・祭祀……「特殊器台」後に変化して埴輪になってゆきます。岡山市花尻の矢藤治山古墳と宮山古墳、その他では奈良の箸墓古墳にしか見られません。吉備の技術が東へ伝播したこととなり、これは吉備の勢力が強大になってゆく魁となります。

大型古墳 造山古墳>作山古墳>両宮山古墳(山陽町)

王が生前から造営を始めた。

休耕期に休農土木事業として始めたと考えられる。エジプトのピラミッドの造営と同様。「吉備国」最大の平野……稲作が盛んになり、富の蓄積へと繋がる。

角力取山古墳 5C後半の造営。「方墳」としては岡山県内最大。

こうもり塚古墳 巨石墳(岡山県の3大巨石墳のひとつ;真備箭田大塚、牟佐大塚)

奈良の石舞台古墳に匹敵する。家型石棺(浪形石;井原市野上産)

こうもり塚の北にある、江崎古墳も浪形石の石棺。これは、こうもり塚の被葬者と江崎のそれは親近者と想定されます。

こうもり塚の名はこうもりが住んでいたから名づけられたが、かつては「黒媛塚」と呼ばれていました。地名(字)は皇墓、大墓など。

\* 黒媛は仁徳天皇の后とされるが、仁徳天皇そのものが正式にいつの時代の方が不明で、故に時代考証が難しい(古事記下巻に記述)

その住まいとされたのが「山懸(やまがた)」……山の方、山の麓、山の畑、山手など山手に黒媛の足跡石といわれるものがある

津山市勝北町山県、津山市一宮山縣にも黒媛伝説があり、備前・備中・美作の各旧吉備国の「やまがた」にその伝説は残っている。

江戸末期～終戦直後に伝承として語られ始めた。(伝説=つくられてゆくもの)

\* ガイドではこれら伝説・伝承などをロマンあふれる形にしていけばよい

(多少強引にでも総社「山手」が黒媛の舞台として案内することもよいのでは)

その他古墳 高梁川左岸に作山を中心に、さらに山を越えて造山を中心に集中している。右岸に真備を中心に集中……権力の集中があったと考えられます。



造山古墳



作山古墳

## 吉備の黒媛伝説

— 吉備氏の栄えるに至った由来の物語 —

皇后石の姫の命は非常に嫉妬なさいました。それで天皇のお使いになった女たちは宮の中にも入りません。事が起こると足擦りしてお妬みなさいました。しかるに天皇、吉備の海部の直の女、黒姫と言う者が美しいとお聞き遊ばされて、喚しあげてお使いなさいました。しかしながら皇后様のお妬みになるのを畏れて本国に逃げ下りました。天皇は高殿において遊ばされて、黒姫の船出するのを御覧になって、お歌い遊ばされた御歌、

沖の方には小舟が続いている。  
あれは愛しのあの子が  
国へ帰るのだ。

皇后様はこの歌をお聞きになって非常にお怒りになって、船出の場所に人を遣つて、船から黒姫を追い下して歩かせて追いはらいました。

ここに天皇は黒姫をお慕い遊ばされて、皇后様に欺って、淡路島を御覧になると言われて、淡路島においてになって遙かにお眺めになってお歌いになった御歌、

海の照り輝く難波の埼から  
立ち出でて国々を見やれば、  
アハ島やオノコロ島  
アヂマサの島も見える。  
サケツ島も見える。

そこでその島から伝って吉備の国においてになりました。そこで黒姫がその国の山の御園にご案内申し上げて、御食物を献りました。そこで羹(あつもの)を献ろうとして青菜を摘んでいる時に、天皇がその嬢子の青菜を摘む処においてになって、お歌いになりました歌は、

山の畑に蒔いた青菜も  
吉備の人と一緒に摘むと  
楽しいことだな。

天皇が京に上っておいでになります時に、黒姫の献つた歌は、

大和の方へ西風が吹き上げて  
雲が離れるように離れていても  
忘れはいたしません。

また、

大和の方へ行くのは誰方様でしょう。  
地の下の水のように、心の底で物思いをして  
行くのは誰方様でしょう。

(角川文庫「古事記」武田祐吉より)

古事記下巻の一に記された黒媛の故郷は「吉備の山形」とあります。仁徳天皇の寵愛を受けながら、正室である大后「石の姫」の嫉妬から故郷吉備へと帰り、それを仁徳天皇が追うという恋物語。

古代吉備国は、今の岡山県全域から、西は広島県東部(備後)、南は瀬戸内の島々にいたる地域をさしていたと言われています。黒媛伝説はこの国域において各地に残されています。

吉備路の中心である総社、倉敷玉島黒崎、津山勝北、備前佐伯など。真実は不明です。



## 第5講座 吉備路の民話と伝承

民俗学は全て伝承の世界。生活にかかわるものは全て伝承です(口伝)。

ガイドの個性・人格が全てお客様に伝わることを考えると、その品格が最も大切なものとなります。

一見他愛のない「生活」にかかわることをお伝えするだけでお客様は喜んでくださいます。そのお客様は「話」を聞くことで、頭をフル回転させて、その様子を頭の中で思い描くもです。民話・伝承は証拠のないものが多いので、その想像の世界に誘い込んでゆくことになります。ガイドの役割は生の声で宣伝すること……そのためにはそれなりの衣装や小道具があれば効果的になります。

### 1、なぜ民話や伝承なのか

民話…… 昔話(桃太郎) 伝説(黒媛) 世間話(水分峠の狐)

\* 人々の口を通して語り継がれてきた、本当にあったとされるお話

### 2、岡山県の昔話といえば……桃太郎

1) 備中地区独特の桃太郎(資料1)

2) 桃の流れる音……県内だけで15種類

3) 桃が2つ流れてくる

4) 横着者(寝太郎)……力持ち(突然発揮)

5) 鬼退治の助っ人……どんぐり、蜂、牛糞、臼、腐れ縄(猿蟹合戦型)

\* 昭和5年に難波金之助(岡山の彫金家)が「桃太郎の史実」を著す

……これ以降桃太郎の故郷は岡山であるという話が広がる

### 3、吉備路の民話

1) 鬼の城(きのじょう)

伝説

資料2

2) 小野小町

伝説

資料3

3) 水別峠の狐

世間話

資料4

4) 雪舟、宝福寺、福山城



### 4、四季の色々な民話

1) 春 ヒバリ

リユウクレモットクレ(利をくれ元をくれ)……金返せと飛んでいる

マムシとワラビ ワラビの恩を忘れたか(3回)

2) 夏 ホトギス

弟かわいや、弟恋しや……

ミミズと土

ミミズと蛇

3) 秋 ルツと亀

4) 冬 ミソサザエ

麦とソバ

吉備路だけでも多くの民話があり、往々にして方言を使うものが多く、それらの解説だけでも多くのお客様への話題提供となる。また、これらの民話の中にこそ、この土地の守るべき風習や伝統があり、大切に伝えて行くことが必要でしょう。

(資料1 ; 岡山の桃太郎その1)

なんと昔があったそうな。

あるところに、お爺さんとお婆さんがおったそうな。

お爺さんは山へ芝刈り(焚き木などにする小さな木の刈り取り)に行くし、お婆さんは川へ洗濯に行くと。お婆さんが洗濯をしていると、川上から大きな桃が、

ドンブリ カッシリ スッパイポー ドンブリ カッシリ スッパイポー と流れてきた。

お婆さんが勺で桃を引き寄せて食ってみたところが、たいそううまかったので、

もう一つ流れえ お爺さんにやろう もう一つ流れえ お爺さんにやろう

と言うと、また、川上から桃が

ドンブリ カッシリ スッパイポー ドンブリ カッシリ スッパイポー と流れてきたと。

お婆さんは、桃を拾って持ち帰り、櫃(物を入れる大きな箱)の中にしまっておいた。

夕方になって、お爺さんが山から帰ってきた。

「お爺さん、お爺さん、今日川で洗濯をしていたら、大きな桃が流れてきたんで拾って戻って櫃の中にしまっとる。出して食べなさい」

「そうか、ちょうど、のどがかわいとるとこじゃ。よばりょうか」

お爺さんが喜んで、櫃の蓋をあけようとしたが、固くて開かない。押しても引いても、どんなにしても開かない。そこで、お爺さんはまさかり(大型のおの)を持ってきて、その櫃を叩き壊したと。そうしたら櫃の中で桃が二つに割れて、中から男の子が生まれとったそうな。

「こりゃ男の子が生まれとるぞ。お婆さんや、桃の中から男の子が生まれとる、うちにや子供がおらんから、うちの子にして育てようじゃないか」

「そりゃ、うちの子にして育てよう」

お爺さんとお婆さんは喜んで、桃から生まれたので桃太郎と名づけて、かわいがって育てたと。

桃太郎はぐんぐん、ぐんぐん大きくなって、すぐに近所の大きな子の様になった。

すると、近所の子供達が、「桃太郎さん、桃太郎さん、山へ木こりに行きましよう」と誘いに来た。

「木こりに行きたいが、きょうは草鞋を作らんといけん。行っとくれ」

「そんなら、明日行きましようや」近所の子供達は、山に行った。

次の日、また近所の子供達がやってきた。

「桃太郎さん、草鞋はできたか。山へきこりに行きましようや」

「今日は、草鞋のひげをむしらん(取らなければ)といけんから行けん。行っとくれ」

その次の日には、「今日は背な当て(荷を背負うとき背に当てる藁製のクッション)を作らんといけん」その次の日には、

「背な当てのひげをむしらんといけん」と言って、山へ行かないと。

それから、「荷緒(荷を背負う綱)をなわんといけん」「荷緒のひげをむしらんといけん」

「鎌を研がんといけん」「まさかりを研がんといけん」「のこの目立てをせんといけん」

次から次に用事をこしらえて、桃太郎はなかなか山へいかんそうな。

「桃太郎さん、まだ道具ごしらえはできんかな。ぼつぼつ行こうじゃないか」

「ああ、やっと道具ごしらえができたから行こうか」

桃太郎は、道具を背負って、みんなと一緒に山へ行った。

## (資料1; 岡山の桃太郎その2)

山へ着くと、みんなはすぐに木こりを始める。ところが桃太郎は、  
「久しぶりに山に来た。ちょっとひと休みじゃ」と言って、日向に腰掛けて休んでいた。すると、そのうちに気持ちよくなって、グーグー グーグー グーグー グーグー 大きな鼾をかいて寝だした。  
「桃太郎さん、もう起きにゃ日が暮れるぞ」 桃太郎は大きな大あくびをして起き上がった。  
「ああ、よう寝とった。ありゃ、ほんに(本当に)お天道さんが、もう西の山に隠りよう。日が暮れる。みんなは荷ごしらえはできたんか」  
「もうとうに(とっくに)荷ごしらえはできとる」  
「そうか。そんなら、わしも荷をこしらえんといけん」 桃太郎は近くにあった一抱えも二抱えもあるような大きな木の根元に行って、ジャージャー ジャージャー と、小便をした。  
- 小便をすると土がやわらかくなるうー  
それから、その大きな木を根元から引き抜いて、担いで家に帰った。

「お婆さん、木を取ってきたで。どこに置こうかなあ」  
「木を取ってきたら木小屋(焚き木をしまう小屋)に置け」「木小屋に置いたら木小屋が壊れる」  
「そんならカド(外庭)に置け」「カドに置いたらカド端(はな)が壊れる」  
「そんなら裏山にでも立て掛けておけ」「山に立て掛けたら山が崩れる」  
「そんなものはいらんから、前の川へ捨てとけ」 桃太郎はその大きな木を前の川に投げ捨てた。  
ドサーン あまりにも大きな音がしたので、爺はじっくり、婆はぱっくりして、腰を抜かしたそう。その大きな音は、遠くまで響いて、お殿様の耳にも届いた。お殿様が驚いて、  
「今の大きな音は何なら、調べてこい」と、家来に命令した。  
家来が調べたところ、桃太郎と言う子供が大きな木を川に投げ捨てた音だと分かったものだから、お殿様に報告した。  
「そんなに力の強い子供がおるのか。それなら、近頃鬼が島から鬼が出てきて悪いことをするので、その桃太郎に退治させえ」

お殿様の命令で、桃太郎は鬼が島に鬼退治に行くことになったそう。な。  
「お爺さん、お爺さん、鬼が島に鬼退治に行くので、弁当をこしらえてくれんさい」  
「そうか。鬼退治に行くんか。そりゃ弁当をこしらえちゃろう。だが、うちは貧乏で米がないけえ、むすびはできん。きびが少しばかりあるんで、きび団子でも作っちゃろう」  
お婆さんが石臼で、ゴーリン ゴーリン ゴーリン ゴーリン きびをひいて、きび団子をこしらえてくれた。それを袋に入れて、桃太郎は腰につけて、鬼退治に出かけて行ったそう。な。  
桃太郎が鬼が島をめざして、どんどんどんどん歩いて行くと、向こうから、ブーンブン ブーンブン と、蜂が飛んできた。  
「桃太郎さん、桃太郎さん、どちらへおいでですか」「鬼が島に鬼退治に行く」  
「お腰のものは何ですか」「これは日本一のきび団子じゃ」「一つつかあさい、お供をします」  
「一つはやらん、半分やるから供をせえ」  
蜂は、きび団子の半分をもらって、ブーンブンと供をして行ったと。

### (資料1 ; 岡山の桃太郎その3)

しばらく行くと、向こうから、コロコロコロコロコロコロコロ ドングリが転がってきた。  
「桃太郎さん、桃太郎さん、どちらへおいでですか」「鬼が島に鬼退治に行く」  
「お腰のものは何ですか」「日本一のきび団子じゃ」  
「一つつかあさい、お供をします」「一つはやらん、半分やるから供をせえ」  
ドングリも、きび団子を半分もらって、コロコロコロコロと供をしていった。  
また行くと、ペッタリコ ペッタリコ と牛糞がやってきた。  
「桃太郎さん、桃太郎さん、どちらへおいでですか」「鬼が島へ鬼退治に行く」  
「お腰のものは何ですか」「日本一のきび団子じゃ」  
「一つつかあさい、お供をします」「一つはやらん、半分やるから供をせえ」  
牛糞も、きび団子を半分もらって、ペッタリコ ペッタリコと供をした。  
また、桃太郎がどんどん行くと、向こうから、  
コッテンコ コッテンコ と、壊れた搗き臼が転がってきた。  
「桃太郎さん、桃太郎さん、どちらへおいでですか」「鬼が島へ鬼退治に行く」  
「お腰のものは何ですか」「日本一のきび団子」  
「一つつかあさい、お供をします」「一つはやらん、半分やるから供をせえ」  
搗き臼も、きび団子を半分もらって、コッテンコ、コッテンコと供をして行った。  
さらに行くと、ゾロゾロゾロゾロ ゾロゾロゾロゾロ 腐れ縄がやってきた。  
「桃太郎さん、桃太郎さんどちらへおいでですか」「鬼が島へ鬼退治に行く」  
「お腰のものは何ですか」「これは、日本一のきび団子じゃ」  
「一つつかあさい、お供をします」「一つはやらん、半分やるから供をせえ」  
腐れ縄も、きび団子を半分もらって供をして行った。  
コロコロコロコロ プーンブン ペッタリコ ペッタリコ  
コッテンコ コッテンコ ゾロゾロゾロゾロ ゾロゾロゾロゾロ  
コロコロコロコロ プーンブン ペッタリコ ペッタリコ  
コッテンコ コッテンコ ゾロゾロゾロゾロ ゾロゾロゾロゾロ  
ドングリに蜂に、牛糞に搗き臼、腐れ縄が桃太郎のお供をして行ったそうなの。  
鬼が島に着いてみると、ちょうど鬼が留守だった。そこで、ドングリは囲炉裏の中に、蜂は水がめに隠れる。牛糞は玄関にベターっと横たわるとし、その上の軒下に、腐れ縄に抱かれて搗き臼が隠れとった。  
しばらくすると、鬼が、「ああ寒い寒い。今日は寒い日じゃ」と言いながら帰ってきた。すぐに、  
囲炉裏で火を焚きだした。すると、バーン と、ドングリがはしれて(破裂して)、鬼の顔に熱灰をかけた。「熱い、あつい、あつーい」鬼はあわてて水がめに顔を冷やしに行った。  
プーン 蜂が鬼の額口を刺した。「やれ痛い、痛い」  
鬼があわてて玄関から外に飛び出すと、牛糞を踏んづけて、つるーっと滑り、ベターンと転んだ。  
その時、腐れ縄が切れて上から搗き臼が、ドシーン と、鬼の上に落ちかかった。  
それで鬼はペッチャンコになってしもうたと。  
鬼を退治した桃太郎は、たくさんの宝物を持って帰り、お爺さんとお婆さんと一生安気に暮らしたそうなの。昔こっぶり、とびの糞、ピンコロ - ピンコロー。



## (資料2 ; 鬼の城と温羅)

総社市鬼城山(標高397M)には、昔、鬼が住んでいた。

その鬼というのは、百済の国(現在の韓国)の王子で、温羅(うら)と言った。日本に渡ってきて各地を巡ってから鬼城山にやってきた。そこに城(鬼の城)を築き住みついたのじゃ。

温羅は、身長が4Mもあり、もの凄い形相をしていて、火を吹いて山を焼き、岩をうがち、水を油にすることができると言う怪力の持ち主だった。

そして、沖を通る船を襲って荷を奪い、村におりては美しい女を連れ去るなどしたので、村人からたいそう恐れられていた。

そのことを知った朝廷は、温羅平定のため吉備津彦を派遣したのじゃ。

吉備津彦の軍は、吉備中山に陣をとり、温羅との戦いが始まった。

中山から鬼の城めがけて矢を放つと、向こうから放った矢と途中で食い合って落ち、相手の陣まで届かない。温羅の軍を攻め、多数に傷を負わせて戦果を挙げたと思っていると、すぐに回復して攻めて来る。よく調べてみると、温泉で傷を治していたのじゃ。

吉備津彦がたたかいあぐねているとき、夢枕に住吉明神が立ち、「一度に二矢を番えて放て。一矢は食いあい、一矢は温羅に命中するだろう」と、お告げがあった。

早速、吉備津彦は二矢を放った。一矢は食い合ったが、一矢が温羅の左眼に当たった。この時とばかり攻めかけると、温羅は雉になって山中に隠れたので、吉備津彦は鷹になって追撃した。

温羅は大雨を降らせ、鯉になって増水した川に逃れたが、吉備津彦は鷓になって追い、ついに捕らえて首を刎ねた。

吉備津彦は、温羅の首を串刺しにして、さらし首にしたが、いつまでもほえ続ける。そこで、かまどの下八尺(2.4M)を掘り、そこに首を埋めたが、それでもほえ続けた。

ある夜、吉備津彦の夢枕に温羅が立ち、「わが妻・阿曾媛(あそひめ)をして釜殿の神饌(みけ)を炊かせよ。世に幸いあればゆるやかに、禍あれば荒々しく釜を鳴らそう」と告げた。

吉備津彦がそのとおりにすると、温羅の首はほえなくなったのじゃ。

いま吉備津神社のお釜殿で行われている鳴釜神事は、このことが起源だというのじゃ。

### < 解説 >

古代山城・鬼の城は発掘調査も行われ、その姿が次第に明らかになり、いま注目の遺跡だ。そこにいた温羅はどんな人物だったのだろうか。

吉備津彦と温羅に関係する伝説地は、総社市とその周辺に多数ある。矢と矢が食い合って落ちたのを祭った矢喰宮、温羅の眼に矢が当たり血が流れて川となった血吸川、鯉に化した温羅を退治した鯉喰神社、吉備津彦が楯を築いた楯築山、温羅の首をさらし、埋めた場所の首部、吉備津彦を祭った吉備津神社などはその一例である。



## (資料3 ; 小野小町)

小野小町は平安時代前期の歌人だが、絶世の美人だったことで有名だ。

小町が生まれたのはどこか、いろいろと言われているが、岡山県もその一つだ。総社市清音黒田である。黒田は、倉敷市酒津から高梁川に沿って少し北上した右側にある小さな谷だ。

小町は子供の頃から美しいことで評判だったが、娘の頃になると、この世の人とは思えないほどの美しさで、そこにいるだけで周囲が明るく光り輝くほどであったと。

黒田の川向こうの村に、金麻呂と言う、これまた美男子がいたのじゃ。高梁川をはさんで小町と金麻呂、二人の美男美女の名は遠くまで聞こえていた。

金麻呂は、小町を一目見るなり心を奪われ、自分の顔にも自信があったので、小町に恋文を送ったのじゃ。

小町は、「あなたのお気持ち、一時のものではない証として、私の元に千夜通ってくださいれば妻になりましょう」と返事を送ったと。

金麻呂は、小町を妻にしようと、雨の夜も風の夜も、熱い夏も凍るような冬も、川を渡って黒田に通ってきた。しかし、千夜という川渡りは並大抵のことではなかった。金麻呂は体が冷え、ついに病の床に就き、命を落としてしまったのじゃ。

村人は金麻呂の死を悼み、丁寧に祭っていたところ、「私を祈れば冷え性で患う人を助けてやろう」と言うお告げがあった。それから多くの人から信仰されるようになり、いまでは金山神社として祭られている。冷え性や下の病気に効験があると言う。

さて、あるとき村人が田植えをしていたとき、小町が通りかかった。田には蛭が多くいて、足に吸いつき、村人が難渋していた。それを見た小町が、蛭封じの歌を詠んだところ、蛭は吸わなくなった。それから黒田では蛭が血を吸わないということじゃ。

また、あるとき、美しい小町の顔一面にかさができ、たいそう醜い顔になったのじゃ。いろいろ手当てをしたが、かさはいっこうに治らない。そこで名高い帯日間山法輪寺の薬師様へ願掛けをして祈願したが、それでも治らなかつた。小町は、薬師様に向かって歌を詠んだ。

「南無薬師衆病悉除の願立て身より仏の名こそ惜しけれ」

すると、「村雨は唯一時の物ぞかし己がみのかさそこに脱ぎ置け」と言う声が聞こえて、かさはすっかり治っていたと。小町は歌に応えて蓑傘を脱ぎ、そばの松に掛けたというのじゃ。

小町がかさで醜くなった顔を映した姿見の井戸、屋敷跡、小町の墓などが今も黒田に残されている。

### < 解説 >

六歌仙および三十六歌仙の一人である小野小町だが、なぞの部分が多い。この話に出てくる歌も、同様のものが各地に伝わる。

## (資料4 ; 水別峠の狐)

旧山手村から倉敷市に越す峠を水別峠と呼んでいるが、昔は広谷峠とっておったのじゃ。

広谷峠によう人をだます狐がおって、広谷狐と呼ばれておった。広谷狐は、峠の東の山腹に狐岩という大きな岩があって、そこを棲み処にしておった。

あるとき、山手の吉兵衛が倉敷に出かけて日が暮れてから峠を帰っておった。すると、一軒家があって灯がとぼっていた。家の前に綺麗な女が立っていて、吉兵衛に声をかけてきたのじゃ。

「吉兵衛さん、遅うなられたんですね。くたびれたでしょう。まあ、お茶でも飲んで帰りなさい」

「そうかな、お茶でもよばりょうか」

吉兵衛が熱いお茶をよばれて、一息ついていると、女が、

「今晚は、ちょうど風呂をわかしたところじゃ。よかったら入っていきなさい」と言ってくれた。

「それなら風呂もよばりょうか」

風呂はええ湯加減で、吉兵衛は鼻歌を歌いながら、ボシャリ、ボシャリやっておった。

「おい、吉兵衛、そこで何をしようんなら」見ると、村の衆じゃ。

「ここで風呂をよばれとるんじゃ。ええ湯加減じゃ」「何が風呂なら。よう見てみい」

吉兵衛が気がついてみると、池の中だったと。広谷狐にきれいに化かされとったのじゃ。

また、あるとき、総社の魚屋が下津井で魚を仕入れて担いで帰っておった。峠まで来ると、急に荷が重たくなったので、後ろを振り向いて見たが何も変わったことはない。それでも荷具合がおかしいので、かごをおろしてみると、後ろのかごの魚がすっかりなくなっておったと。広谷狐の仕業じゃ。

広谷狐の悪さには、村人も旅人もほとんど手を焼いておった。そこで村人が相談して、兎島の瑜加大権現を勧進しようということになった。分霊を峠の西の山に東向きにお祭りして、東の狐岩をにらみつけるようにした。それから、狐の悪さも少なくなったということじゃ。

同じ頃塩飽(香川県)の魚問屋が、岡谷と宿の分かれ道のところに、立派な魔除けの地蔵を立てて、狐が悪さをしないようにと祭ってくれたと。

そんなことから広谷峠で狐に化かされるということはなくなったということじゃ。

今でもお地蔵さんは、三差路のところに立っていて、交通事故のないように守っていてくださる。

### < 解説 >

5、60年前までは狐にだまされたということがよくあった。水別峠も、いまのように家はなく狭い道で淋しい場所だった。旅人などは、旅の安全を路傍の地蔵などに祈って旅をしたという。狐が人をだまさなくなったのは、電灯がついてからだともいわれている。

この地蔵は高地蔵とも呼ばれる。台座は大石2個を重ねたもので、地面から地蔵の上までの高さは327cmもある。

## 吉備路

今ではよく知られるようになった吉備路ですが、ひと口に吉備路といってもずいぶん広い範囲にわたっており、だいたい、東は岡山市の西部にある吉備津彦神社から西は総社市を経て真備町(現倉敷市)、矢掛町にいたるまでを指しています。

吉備地方は、ご存知のように大和や九州と並ぶ高い文化を誇ったところで、中でもこの吉備路一帯には、数多くの古墳をはじめ貴重な文化遺産が集中しています。その昔、吉備地方を平定したという吉備津彦の伝説もここが舞台となっており、吉備路には古代のロマンがあふれています。

例えば、吉備津彦の温羅退治にまつわる矢喰宮や鯉喰神社、温羅が流した血でできたという血吸川もあります。また、あの仁徳天皇の恋人といわれた黒媛の墓と伝えられていたこうもり塚古墳もここにあります。中国の唐に派遣され、当時の日本文化に大きな影響を与えた吉備真備も、ここ吉備路の出身です。

もちろん、古代だけではありません。岡山と総社のまん中あたりにある備中高松には、戦国時代、羽柴秀吉(のちの豊臣秀吉)の水攻めを受けた高松城跡があります。また、吉備路のメインロードからはずれますが、高松から北に向かうと足守藩、木下家ゆかりの武家屋敷なども残っています。

このように、吉備路では神話の時代から近世の時代まで幅広い歴史ドラマが繰り広げられてきたわけです。一見どこにでもあるような田舎風景ですが、ここは今もはっきりと古代の息吹が感じられる「歴史の宝庫」なのです。もし、時間が許すなら、ぜひこの吉備路をじっくり時間をかけてまわってください。

今は自転車道も整備されていますので、足に自信のある方はレンタサイクルでまわるとよいでしょう。そして、じかに吉備の風を肌を感じていただきたいと思います。

## 吉備路風土記の丘

「吉備路風土記の丘」とはシャレた名前をつけたものですが、ここは吉備路の中でもまさしくメインテーマと呼べるところだと思います。ここには東西にゆったりとした田園地帯が広がり、数多くの史跡や古墳があります。例えば、日本全国で4番目のスケールを誇る造山古墳、吉備路のシンボル備中国分寺や国分尼寺跡、仁徳天皇の恋人・黒媛の墓とも伝えられていたこうもり塚、吉備路風土記の丘とその周辺から出土した貴重な考古資料や写真を展示した吉備路郷土館など、見どころはたっぷりあります。

ところで、観光地というと妙に開発されすぎて情緒を失ってしまう場合が少なくありません。ところが、この吉備路、特に国分寺周辺は昭和45年に「吉備路風土記の丘県立自然公園」として指定され、周囲の景観をできるだけ大切にしながら、公園の整備を行っていくと、いろいろな努力がされています。

例えば、国分寺周辺を見てください。電柱が見あたらないことに気づかれたでしょうか。これは、中国電力に電柱を地上に出さないように特別に依頼し、電線を全て地下に埋め込んでもらったのです。また、周辺の田園の景観を守るため、水田にはれんげの花、畑には菜の花、そして桃の花を植えて春を演出しています。特にれんげの花については、総社市の青年グループ協議会の若者が主になって、昭和60年から五重塔周辺の田んぼにれんげの種まきを続けています。毎年4月29日には「吉備路れんげまつり」がこの国分寺で開かれるのですが、れんげの可憐な花がまつりのムードをいっそう盛り上げているようです。

このように大勢の人の手で守り続けてきた吉備路の魅力は、何といても古代の息吹がそのまま伝わってくるような素朴な情緒そのものだと思います。ぜひ、ご自分の足で風土記の丘を回り、歴史の香りを感じ取ってください。

## 備中国分寺

奈良時代には、天平文化と呼ばれる華やかな仏教的文化が花開いた時ですが、一方では朝廷でのたび重なる権力者の勢力争いや伝染病の流行、ききんなどでとても不安定な時期でもありました。こうした世の中を仏教の力によってなんとか安定させようと思いたったのが、仏教への信仰が厚い聖武天皇でした。

そこで天皇は741年に国分寺造営の詔勅を出し、全国に国分寺を建てたのです。この備中国分寺もその時建てられたものです。天平時代は天皇のバックアップもあって栄えていましたが、平安時代になってからは次第に衰えはじめ、南北朝時代、ここからすぐ近くの福山であった福山合戦の時、残念なことにそのほとんどが焼けてしまったといわれています。創建当時は七重塔をはじめとする七堂伽藍を備えた壮大なものだったようですが、その後、江戸時代の再建で現在のような伽藍になったということです。

(五重塔の方へ歩いていながら)

こちらが吉備路のシンボルともいべき五重塔です。てっぺんの相輪まで含めると約38mもあります。この塔の造りには、真ん中を太い心柱が一番上の層まで貫いているという古代様式が使われています。これがすべて木造というのですから、昔の建築技術というものはたいしたものですね。

もともと塔は、釈迦の遺骨を納める墓として造られているもので、とても静寂なものです。だから塔の上に上るなどはもってのほかであるわけですが、この五重塔は五層まで上がることのできる設備が造られており、とても珍しいものです。もっとも今は傷みが激しいため、中へ入ることはできません。



## 備中国分尼寺

ここを訪ねてこられた方の中には、「この赤松林は風情があっていいなあ」と言われる方がおられます。また、ひっそりとして静寂な雰囲気と言われる方もおられますが、実はここには、今は形がありませんが、立派な尼寺があったそうです。

ここに点々とある丸い台のような石ですが、何だと思われませんか。きれいに並んでいるでしょう。これが、備中国分尼寺というお寺の柱が立っていた場所なんです。奈良時代の寺院建築独特の方法で、この真ん中の出っ張った所に柱のくぼみをはめ込むんです。柱の太さは直径70cmでこの台の並び方からすると、南から南門、中門、金堂、講堂などかなり豪華で規模の大きい伽藍だったのではないかとされています。

例えば、こちらの金堂跡の石の並び方からすると、16m×13mの金堂が建っていたのではないかとされています。このお寺の範囲も東西108m、南北225mということですからかなり広いですね。建物が昔のまま残っていたらよかったのですが、約650年前、南北朝時代の福山合戦という戦いで焼けてしまったといわれています。その戦いでは、この辺りのお寺がたくさん焼けたそうです。名前からもわかるように、国分尼寺は奈良時代、聖武天皇が全国に造られた国分寺と一緒に建てられたものです。すぐに近くにあるのが国分寺でこちらは国分尼寺。尼さんがこの寺を守り、運営していたわけです。

## 作山古墳

古墳が造られた当時、岡山県と広島県東部は吉備地方と呼ばれ、大和に対抗する大きな勢力をもっていました。5世紀ごろに造られたこの作山古墳は、造山古墳とともに、吉備を支配していた人の墓と考えられています。全長約290m、高さ24mの大きさです。県下では造山古墳に次いで第1位、全国でも第9位の規模を誇る前方後円墳です。全体が三段に築かれていて、各段には素焼きの円筒埴輪が並べられていたようです。では、実際に古墳の上を歩いてみましょう。

このような大きな古墳では陵墓となっているのがほとんどで、一般の人々が足を踏み入れることができません。しかし、吉備の二大巨墳造山、作山は自由に立ち入ることができる最大級のもので、しっかり見て歩いて何かを感じとってください。

上にとってみると前方後円墳のかぎ穴の形がよくわかると思います。このような巨大な古墳が造られた背景には、工事にかかわった多くの人々が犠牲になっています。それを思うと、ただただ外観にみとれているだけにはいかない気がするのですが、みなさんはいかがでしょう？



## こうもり塚

この辺りでは吉備の中でもっとも古墳のたくさんある所なんです。皆さん何気なく歩いて来られたかもしれませんが、歩いている足の下が古墳だったりするんですね。このこんもりとした丘のように見えるのも、実はこうもり塚と呼ばれる古墳なんです。全長約100mと造山古墳に比べれば小さいですが、横穴式の石室としてはかなり広く、長さ約19m、飛鳥の石舞台に匹敵する大きさです。この辺りの古墳は大和朝廷が勢力を誇っていた5～6世紀ごろに造られたもので、大きさや数から考えても、この周辺を治めていた吉備地方が間違いなく大和の目の上のたんこぶだったようです。書物によると大和に対抗できたのは吉備地方ぐらいのもので、その勢いには一目置かれていたようです。

こうもり塚という名前は、こうもりがたくさんいたからだそうです。これはまた黒媛の墓とも言われていました。古事記に出てくるお話です。仁徳天皇のころ、吉備の豪族の娘・黒媛は天皇にとっても愛されていたのですが、お后がやきもち焼きで、黒媛はいじめられて吉備に帰ってきたそうです。帝は彼女のことを忘れられずお后に嘘をついて吉備の国まで会いに来られ、一時の逢瀬を楽しんだということです。「山方に 蒔ける青菜も 吉備人とともにし摘めば 楽しくもあるか」帝が黒媛の姿を詠んだ歌です。二人が結ばれることはなかったそうですが、今の若い人たちも負けそうなくらい情熱的な関係だったようです。当時にすれば、帝をとりこにしてしまう女性が吉備にいたことが、吉備地方と大和朝廷の強いつながりを見せつける一つの材料だったようです。この古墳は江戸時代に盗掘されて中が荒らされていたのですが、昭和42年に整備されて中の構造がはっきりしました。保存のために途中までしか入れませんが、近くにある江崎古墳が似た造りで中を見ることができます。



## 造山古墳

ガイドさんなしで初めてここに来られる方は、たいてい古墳が見つからず戸惑ってしまうそうです。というのも、古墳があまりにも大きいのでみんな小高い山と見まちがえてしまうからなんです。この造山古墳は前方後円墳の中では大阪の仁徳天皇陵、応神天皇陵、履中天皇陵について全国で4番目の規模といえますから、そのスケールの大きさは推して知るべしですね。

ところで、歴史の上では古墳が多く造られた時代を古墳時代と呼んでいます。これはだいたい、4世紀から7世紀ごろまでをいうんですね。この造山古墳が造られたのは、今から約1500年ほど前のことです。当時はもちろんトラックやパワーショベルなどありませんから、こんな平地に土を盛るのは当然人の力に頼るしかないわけです。といっても、この古墳は長さ360m、後ろの丸い部分の高さだけでも32.5mもあるのですから、とてつもなく大勢の人手が必要だったはず。おそらく延べにすると数万という人が長い年月をかけて完成させたことと思われます。でも、それ以上に興味深いのは、この古墳を築かせた人の権力が、どれほど大きなものだったかということです。

みなさんもご存知のとおり、古墳は当時その地方を支配していた権力者のお墓です。造山古墳については、いったい誰のお墓なのか残念ながらわかっていませんが、ただ、周りに陪塚が6つもあることから、かなりの権力者であったことはまちがいないようです。もし、この時代の支配者たちの力が古墳の大きさを表されるものだとしたら、造山古墳に葬られた人は、大和の国々を統一した天皇にも匹敵する力を持っていたということになります。



## 角力取山(すもうとりやま)古墳・大松

古墳の種類は、その形から3種類に分けられます。造山古墳などに見られるような前方後円墳、丸い形をした円墳、それに四角い方墳です。この角力取山古墳はそのうちの方墳に分類するものです。この古墳は四角の一辺が38m、高さは4～5mあり、吉備路で今日知られている方墳の中でも最大のものといわれています。

ところで、こうした古墳には、例えば鏡であるとか装飾品といったいわゆる副葬品と一緒に埋められているものです。ところが、第二次世界大戦の頃、この古墳あたりに防空壕を掘った時には、何も見つからなかったそうです。須恵器もないし、あるのはわずかに円筒埴輪の破片らしきものだけ。国分寺近くにあるこうもり塚では、横穴式石室の中に石棺も残っていますが、この古墳にはその形跡すら残っていなかったのです。

こうしたことから、この古墳は横穴式石室が作られる前にできたもので、棺もねんど槨か木棺を使って直接葬られたのではないかとされています。横穴式石室が造られるようになるのは5世紀後半頃からです。この古墳が造られたのはそれ以前ということになります。

それにしても角力取山古墳とはユニークな名前をつけたものですが、古墳の上が平らになって相撲の土俵に似ているところから、こうした名前と呼ばれるようになったそうです。

頂上には御覧のように大きな松の木がはえており、今ではすっかりこの古墳の目印になっています。この松は樹齢が約400年のクロマツで、周囲は5m、高さは20mもあり、国分寺五重塔とならんで吉備路のシンボルの両横綱といえます。また、平成元年12月には国際花と緑の博覧会選定の新・日本名木100選のひとつにも選ばれ、横綱の風格が一層ついてきたようです。

## 福山城跡

のどかな田園地帯に広がる歴史の宝庫、吉備路は、およそ争いごとには無縁のような感じがしますが、実はここもかつては戦いの舞台になっています。時は今から650年ほどさかのぼります。鎌倉幕府が滅び、代わって後醍醐天皇による親政が始められましたが、これも長くは続きませんでした。そこへ足利尊氏が登場したのですが、これを許さない天皇方の新田義貞と京都でぶつかりました。敗れた尊氏は九州の筑紫に逃れましたが、途中、備前・備中・美作を味方につけて、追ってくる新田勢に備えました。筑紫で態勢を立て直した尊氏は早速東に向けて進撃し、尊氏は海路、弟の直義は陸路を進みました。そこで新田方はこの備中福山城に立てこもり、足利軍に備えました。福山城といっても、その大きさや構造ははっきりと分かりませんが、当時、福山には福山寺という寺がありました。この寺は12坊を構える大きな寺だったのですが、これを城の代わりにしていたのだらうと言われています。

さて、この時の足利方の兵は30万騎。一方、新田方は1500騎といえますから、勝負は初めから決まったようなものです。直義が仕掛けた第一陣は石つぶてや岩落しで全滅させたものの、山の周りを大軍で取り囲まれたため、新田方は直義を討ち取ろうと1500騎のうち1000騎を連れて決死の覚悟で大軍めがけて攻撃し、何とか2万騎を倒しました。でも、直義を討ち取ることはできず、結局城に火をつけ、残りの500騎も討ち死に、城も焼け落ちてしまったのです。今、そこには寂しげに碑が立っているだけですが、この戦いはのちの南北朝の対立を生むきっかけとなった戦いでもあったのです。

(福山は海拔302m。国指定の史跡。太平記によると、足利方は20万騎、新田方は2千余騎の戦いで、新田方は中央突破し、三石まで退いたとされています。新田方の大將は大井田氏経)

## 軽部神社

軽部地区の氏神様で、軽部神社といえます。どうぞ中を覗いてみてください(拝殿の中を覗いていただく)。特に男性の方がここにおいでになると、目が釘点けになるようで、あれは全部女性のお乳なんです。お母さんになる人がここにお参りして、「よく乳がでますように」と願って納めた絵馬です。板や厚紙に布で作ったお乳をくっつけて作っているんです。今は粉ミルクがありますから母乳が出なくてもあまり困りませんが、昔は「お乳が出ない」というのはきっと大変なことだったと思います。お乳が出なくてお姑さんにいじめられたお嫁さんもいたのではないのでしょうか。母乳をあげたら胸の形が悪くなるわ、なんて言っている若い人も、これを見たら「母は強し」のパワーに圧倒されて、「しっかりとお母さんなくては」と思うのではないのでしょうか。歴史的にははっきりしませんが、少なくとも明治時代になる前から母乳が出るようになる神様として信仰されていたようです。

神社そのものは建武元年(1334年)の建立と伝えられています。

### 総社以外の吉備路エリアスポット



吉備津神社



鯉喰神社



最上稲荷



## 資料 黒媛サミット(講演内容)

基調講演 「吉備の黒媛」

岡山民俗学会名誉理事長 立石憲利

皆さん、こんにちは。ただいまご紹介をいただきました立石です。赤い着物を着てまいりました。いつも昔話を語るときに、こういう格好をするものですから、今日も場を間違えまして、昔話を語るとき用の格好をしてまいりました。昔話のように楽しく語ればいいのですけれども、どうかと思っています。

私は『古事記』や『日本書紀』というのは、専門ではございませんし、時に読むぐらいのことなので、黒媛の話が面白く語れば一番いいのですけれども、それにしても、しばらくの間、お付き合いを願いたいと思います。

『古事記』とか『日本書紀』というのは、戦前には学校の歴史の教科書の中で、そういうものが中心になって教えられていたのですが、戦後はそういうものを習うチャンスが非常に少なくなっています。専門家の方は、よく読んでいらっしゃるし、最近では『古事記』とか『日本書紀』の話が時々出てくるのですが、一般では、特に私たちの年代は、『古事記』や『日本書紀』にはほとんど目を通したことがない年代になるわけです。

ちょうど今から1300年ほど前に『古事記』というののできて、当時、天皇を中心にした歴史書、日本で一番古い歴史の書物としてできたわけです。これから8年ほど後に、天皇ごとに、年ごとにきちんと作られた『日本書紀』という歴史書が作られるわけです。古代の歴史書と言いますと『古事記』と『日本書紀』ということになります。『古事記』というのは3巻に分かれておりまして、その第3巻の最初に仁徳天皇の条があるわけです。仁徳天皇というのは、以前には教科書にも載っていたかと思いますが、いわゆる聖帝(せいいてい)、大変国民に対して良い政(まつりごと)を行った天皇だということで、聖帝(ひじりのみかど)というのですが、聖帝伝承が伝わっております。

大抵の方は少しぐらい話をお聞きになられたことがあると思いますが、仁徳天皇が高い山に登って、四方をずっと見渡している。そうすると、普通の民家、民のかまどから煙が出ていない。これは人々が、たいそう貧しくて苦しんでいるのだ。これから3年間、税金を免除する。昔で言うと、租税と賦役で働きにできますから、そういう税金を3年間免除すると。今だったらうれしいですがね。そういうことを行って、そのために天皇が住んでいらっしゃる館は直すことができないから、雨漏りがする。雨漏りがすると、器を持って雨漏りを受ける。ちょうど僕の家のようなのですが、それから雨漏りがしない所に逃げていく。

そういうことをして3年間が過ぎて、もう一回また高台からずっと見る。そうしたところが、民の家からかまどの煙が出ていたので、これでみんなの暮らしも元に戻ったのだらうということで、税金をかけるようになったのだと。そういう話が伝わっているわけです。

私たちも、今の世の中は大変暮らしが厳しいですから、3年間、税金を免除する。消費税だけでもいいですから、免除することになりますと、少しは懐具合がよくなって、消費が拡大して、日本の景気もよくなるのではないかなと思うのですけれども、今の世の中、仁徳天皇のような、そういう政治家がいなかったが大変残念なのです。

その聖帝伝承に続いて出てくるのが、黒媛のお話なのです。仁徳天皇というのは、字でみても「仁徳」と書くわけですから、聖帝伝承がそのままに天皇の名前になっているわけです。仁徳天皇のお墓だと言われているのが、大阪府の堺市にあります大仙陵古墳です。これが仁徳天皇のお墓なのだという伝承になっておりまして、前方後円墳で日本で一番大きい古墳です。全長が485メートル。先ほどもご紹介したなかでありました、総社市のすぐ隣の岡山市の造山古墳。これが全国4位で360メートルですから、造山古墳より100メートル以上、長いということで全国最大です。

そこにあります作山古墳は286メートルですから、200メートルほど仁徳天皇のお墓と言われる大仙陵古墳より小さいのですが、それにしても大きな日本最大の古墳が仁徳天皇という、聖帝伝承が伝わっている天皇のお墓なのだと言われるように、それほど伝承としては素晴らしい天皇でおられたということが、これでもわかると思うのです。その聖帝伝承の後に黒媛の話が出てくるわけです。

先ほどのご紹介したなかで、仁徳天皇の皇后、磐之媛(いわのひめ)という方がいらっしゃったのですが、この人は焼餅焼きでして、普通とちょっと違ったことを言おうものなら、足をだんだんと踏みならして、焼餅を焼いて怒るという方だったようです。私の近くにも、そういう方が一人いらっしゃいますけど、本当に焼餅焼きというのは困ったものです。

しかし、昔は一夫一婦制ではございませんから、天皇も皇后のほかにもたくさんの方がいらっしゃったわけで、その一人として吉備の海部直(あまべのあたえ)の娘さんを后にするわけです。それが黒媛という名前です。

黒媛というのは、どうして「黒媛」と言うのかは、よくわかりません。ほかに読んでいますと「黒媛」という名前が出てきますね。「黒」といったら鉄のことを「黒」と言いますから、鉄の産地の姫なのか、それとも健康で黒くまめめしい、そういう健康な娘さんだから黒媛になったのかよくわかりませんが、「黒媛」というのを召し上げるわけですね。そして『古事記』によりますと「容姿端正」と書いてありますから、たいそう姿形が良かったのだらうと思います。

ところが、天皇が黒媛と仲が良くなるものですから、皇后は大変な嫉妬を起すわけですね。そうして、その黒媛に当たるものですから、とうとう耐えかねて、黒媛は自分の国、吉備の国に帰るということで船に乗って帰っていくわけです。

天皇は高台に登って、その黒媛が去っていく姿を見ながら、「沖のほうに小さな船を連れて、私の愛する女の人が国のほうに帰っていく」というような歌を歌うわけですね。それを聞くと、また皇后が嫉妬して、焼餅を焼いて、「あの船を追っ払え」ということで、黒媛の乗った船を追っ払ってしまい、黒媛に陸路を歩かせて帰らせるということにするわけです。困ったものだと思いますが、そういう女だったのです。そうして黒媛は、歩いてこの吉備の国に帰ってくるのです。

ところが、あの黒媛のことが忘れられない。私もそういうことが昔ありましたけれども、忘れられないということで、奥さんには「ちょっと淡路に行ってくるからな」と嘘をつきまして、一応、淡路までは行くのですが、淡路に行って、それから一歩足を伸ばして吉備の国にやって来るわけです。

吉備の国の山方の地(ところ)に黒媛はおられたということで、そこを訪ねて行くと、黒媛は天皇にお食事を差し上げる。それと同時に、羹(あつもの)ですから、温かいお汁を差し上げようということで、それを作るために青菜を摘んでいた。菜っ葉の汁を天皇に差し上げようということで青菜を摘んでいたところで、天皇が歌を歌われたわけです。「山縣に 蒔ける菘菜も 吉備人と 共にし採めば 楽しくもあるか」。山方にまいた青菜を吉備の女性と一緒に摘むと、何と楽しいことであろうという歌を歌うわけですね。

そうして、しばらくの間、黒媛と仁徳天皇は幸せな時間を過ごされて、天皇は帰らないと怒られますから、それから政治もありますから帰って行かれるのです。そうすると黒媛は「大和のほうに、西のほうから風が吹いて雲がちりぢりになる、それと同じように天皇と私はちりぢりばらばらになるけど、私はあなたのことを忘れませんよ」というような歌を歌うということが、その項に書いてあるわけです。ここに書いてあるのは、天皇の歌が2つと、黒媛の歌が1つ書いてあります。例えば「山懸に 蒔ける菘菜も 吉備人と 共にし採めば 楽しくもあるか」という歌を、黒媛が菜っ葉を摘んでいる時に天皇が歌う。それで終わるとは思えないですね。昔、嬬歌(かがい)というのがありまして、恋人を探す若い男の人と女の人が集まって、お互いに歌を歌いあって、それで自分の恋人を選ぶというものがありました。それと同じように、たぶん天皇がその歌を歌ったら、『古事記』には載ってありませんが、黒媛も歌を歌って返していると思うのですね。

私の熱い思いは、これから作る羹、熱い汁のように、もう本当に手もつけられないのですよというような歌を歌うとか、私だったらこういう、すぐ食べものや恋を結びつけた歌を歌うと思うのですが、そういうような歌を歌う。それが両方書いてあると、この『古事記』ももっと面白いだろうと思えますけれども、天皇の歌を中心に書いてあるのです。

そういうことで天皇と黒媛は別れるわけですから、黒媛の悲恋物語だと今この人は言っているわけです。

ところが『日本書紀』には、高台から見たかまどの煙の話は載っていますけれども、黒媛の話は載っていないのです。そして『日本書紀』には応神天皇の項に、この黒媛の話とまったく同じ話が載っています。これも出てくるのが、吉備臣の祖御友別(オヤミトモワケ)という人の妹で兄媛(エヒメ)という后。それとの関係の歌で、同じように淡路島まで行って、そして吉備の国にやって来る。歌も同じような歌が載っているのです。

これは応神天皇の項に載っているわけですし、そういう意味では、こういう物語というのがあって、それを『日本書紀』や『古事記』を書く時に、適当にそういう名前をつけて入れたのではないだろうかと、私なりの結論から言うのですが、そういうふうに思っているわけです。

それにしても吉備の国からは、天皇の后になった人がたくさん、もちろん正室にはなっていられなかったのですけれども、后になった人がたくさんいらっしゃるということで、やはりこれは、きれいなだけではないと思うのです。吉備の国が、たいそう力を持っていた。大和に対して引けを取らないほどの大きな力を持っていなかったら、そう天皇の妃には、なかなかしないと思うのです。そういう関係を通じることによって、吉備の巨大な力と、大和のそういう力が、うまく戦争をしないでやっていったのではないかなというように、こういう話を読みながら思うわけです。

さて、先ほどの吉備の山方に天皇がやって来た。では山方はどこか。ここに山方がついているから、ここに黒媛が住んでいて、仁徳天皇もいらしたのだというのが県内各地にあるのです。山方というのは「山」の「方」ですから、東京にある山手線と同じ山の手ですね。そこで、この間の合併で名前がなくなりましたが、山手村(やまてそん)の山手と同じ地名だろうと思うのです。

それから、歌のなかにある「山懸に蒔ける菘菜」、この場合は万葉仮名のように「夜麻賀多」と当て字でなっております。そうすると、先の「山方」は「山」の「方」になっていて、歌のほうは「山懸」と漢字を当てているわけですが、この歌のほうの「山懸」は山畑の意味なのだという解釈がされておられます。いろいろな説があるのですが、岩波の『日本古典文学大系』の校注によりますと、そういうようになっています。

山懸、山のほうにある畑、もしくは山畑は同じなのでしょうけれども、山方というのを地名と見るか、山の手の方、山の手は各地にありますから、そういう所か、そこらへんは解釈の仕方が分かれてくるということです。

そういうことで、「山方」が付いている所が黒媛の場所なのだということで、次から次に、例えば「山方」と書いたり、山手は「山方 = 山手」だから山手村もこういうことだと。それから「山形」と書いたり「山県」と書く所、そういう所なんか黒媛の地だということを目指しているのです。

昔話というのは、「なんと昔があったそうな」「あるところに、おじいさんとおばあさんがあったそうな」というように、「昔、あるところに」と、「昔」ですから時間もはっきりしません。「あるところに」ですから場所もはっきりしません。おじいさんとおばあさんは掃き捨てるほどおりますから、はっきりしません。「あったそうな」、あったということです、本当か嘘かわかりませんよというのが昔話ですね。時間も場所も主人公もはっきりしない、架空の話というのが昔話です。

伝説というのは、それと違って、これはこうなのですよと信じられることが伝説なのです。このことは本当のことだと言って信じられる、信じられる物語が伝説なのです。信じるためには物がないといけません。だから、こういう石がありますよ、こういう物がありますよという。「記念物」と言ったりするのですが、その記念物があることが一つの伝説の特徴です。

だから黒媛の伝説については、例えば、地元総社市の伝説で言うと、ここぞ黒媛なのだという「こうもり塚」。昔はあそこに「黒媛塚」という看板が立っておりました。歴史と神話を混同するのはよくないのではないですかと、私は若いころに県の教育委員会に言ったりしまして、こうもり塚が黒媛塚になった経緯もあり、私も責任を感じているのですが、黒媛塚というお墓があるのなら本当だということですし、『古事記』に載っている「山方」というのは、実は山手なのだ。だから、ここが本当なのだ。

それから天皇が黒媛と一緒に山に登られた。行幸されたから、幸山城のある幸山になった。それから幸山のふもとには、黒媛の足跡というものがあるのです。黒媛の足跡石というのは2カ所あって、両方とも昔の清音村の三因なのですが、一つは1メートル50センチぐらいの大きな岩に、17センチ×8センチですから、このくらいです。黒媛の足はちょっと小さかったのでしょうね。その足跡がきちんとついている。

もう一つのほうは、ちょっと平べったい石なのですが、80センチと50センチぐらいの石に、これも8センチと6センチ、これこそ小さいですね。纏足(てんそく)ではないかなと思われるぐらいの小さな足跡がついて、これが仁徳天皇と一緒に幸山に青菜を摘みに行った、その時の足跡なのだというのが伝説として残っているのです。

お墓もあるし、地名もあるし、幸山という山もあるし、足跡石もあるから、こここそが黒媛の本当の所なのだと思えるところから、伝説というのは始まるのです。それが本当かどうかは請け合いませんが、そういうところで伝説になっているのです。ですから、ほかの地域でも同じように、こういうものがあるから、うちこそ黒媛の地だということになっているのです。

岡山県内では、例えば黒媛の地というのは、私は一番最初、この山手の黒媛塚のある所だと思っていましたが、ここだけではない。今日のシンポジウムで出て来ていらっしゃる総社のなれば、みちこ先生は総社ですからいいのですが、倉敷市玉島の黒崎、それから津山市の勝北、ここにも黒媛の塚があるのです。それから昔の佐伯町、今は和気町になっています。これだけでも4カ所あるのです。

そのほかに、津山にもう一つ、山方という所があります。津山の一宮神社の少し北のあたりに山方という所がありまして、ここが黒媛の本拠地だという石柱が立っております。それから倉敷市の中庄に黒崎という所があって、そこに山県という所がありまして、そこもそうだと。それから昔の吉井町、今で言うと赤磐市になるのですが、吉井町の是里に大宮山という所があるのです。「大宮」ですから天皇が来られた山だということで、ここもそうではないかというように、岡山県内で7カ所か8カ所。このほかにも、たぶんあると思うのです。そういうように、わが所こそ黒媛なのだという所がたくさんあります。

それなら、どちらが正しいかと言って詮索するのも、また一つ面白いところだろうと思うのですが、このたびはお互いに想像をたくましくして、わが所が本家なのだということをお互いに競い合ったらいいのではないかと思うのです。いや、それは単なる『古事記』に書かれた話なのだから、そんなことを本気にしなくてもいいのではないかと、そんな無粋なことは私は言いません。お互いに、わが所こそ黒媛の本拠地だということで、大いに宣伝をしてもらったらいいと思うのです。

今日は黒媛サミットを開くということで、吉備路商工会の方から言ってこられて、私は頼まれると「はいはい」と、すぐ受けるのです。何もできなくても、すぐに受ける悪い癖があるのですが、どうせ30人から50人くらいのものでしょうからと思って受けて、3日ほど前に「何人くらい集まりましたか」と。30人と言ったら叱られると思って、「100人くらい集まりましたか」と声をかけたら、「何を言われるか。200人の応募定員に対して270人で、次から次に申し込みがあるんだけど全部断っている」と。今日、見ましたら、これだったら300人を越えていっちゃうから、よくも300人を越える人が、この黒媛のためにいっちゃうのだなと思って感心しました。率直なところ、そうなのです。

でも考えてみると、これはやはり一理あると思うのです。今度のこのサミットのピラを見ましたら、地域資源、それから無限大、全国展開プロジェクト事業というのが一番上に書いてあるのです。地域資源は無限大で、全国展開をしようということですね。

地域資源、私たちは「資源」と言ったら、鉱物があるとか、農産物にどんなものがあるか、工業製品にはどんなものがあるかということ、すぐに資源だと思うのですが、考えてみると、資源はそんなものだけではなくて、例えば、この歴史はどうかとか、この景観はどうか、この民俗はどうか、この伝説はどうかとかということも大いなる資源だろうと思うのです。

そういうものは、言ってみると無限大にあるから、それを活用して、地域の活性化や商工業の発展のために役立てようというのが、今回の黒媛サミットの本旨ではないかなと。

なぜ今の時期に、こういうものが行われるようになってきたか。去年まで約6年間は、日本はたいそう好景気だと言われました。6年間も景気のいいのが続く。これは大きな企業だけで、一般の労働者や庶民のほうには、なかなかおこぼれが回ってこない。地方自治体も財政が大変だと。

だから、みんな閉塞感が漂っておりまして、この先はどうなるのだろうか。若い衆も将来の展望はない、年寄りはどうなるのだろうか、これから病気になったらどうなるのかなというように、将来の展望がない時代になっていますね。それは地方自治体もそういう状況なのです。国に頼んだところで国からもやってくれないし、金をもうけているはずの大企業も何もやってくれない。そういうなかで、では、どうやったら自分が生き延びることができるかということを考えざるを得ないようになるのです。

ちょうど今、こういう閉塞感のある時期というのは、昭和の初期、世界大恐慌が起こった後の状況に非常によく似ていると。東北地方では、そういう不況と、さらに冷害が重なって農村では作物ができない。だから娘を都市に売る、それから餓死者もたくさん出るというような時代。これは日本全国そうなのです。

そういう時代にどういうことをやったかということ、みんな自分の村をもう一回見直して、自分の村にある資源をどう生かして、自分の力できちんとやっていこうかということ考えたのです。今の言葉で言うと「内発的発展」というような言い方をしますが、そのように自分の力で、人に頼らないで、頼れないから自分の力で、その力を生かして、どう地域を發展させて、みんなが生き生きと暮らしていけるような地域づくりをやっていくかということ、昭和の初期には考えたのです。

それは大人だけではなくて、子どもたちも、子どもたちには郷土教育というのをやりました。ふるさとのことをもっと勉強しようと言って、学校の先生方が中心になって、小学校ごとに郷土教育資料というのを作りました。岡山県でも、たぶん作られたと思うのですが、岡山県で郷土教育資料が残っているのは、ほんのわずかです。

私は岩手県に一度調査に行きましたが、岩手県はほとんどの小学校ごとに、これの倍くらい、ガリ版で切ったり、タイプで打ったり、活版で印刷したりして、高さにして2メートルくらい、そういうものが今でも残っているのです。その当時の先生方は、その村について細かく調べて、先ほど言った伝説や昔話、そういうものも含めて、きちんと調べておられるのです。本当に感心しました。

そのように、その時代、自分の村にあるものを、例えば農業ではどういうものがある、工業ではどういうものがある、山の方面ではこういうものがある、それからどういうものがある。伝説もあるし、そういうものもあって、そういうなかから何を生かして村づくりをやる、地域づくりをやるということを取り組んだのです。

そのなかで一つ有名なのが桃太郎伝説です。全国各地に何十カ所もありますが、有名なのは三大桃太郎伝説地でございます。一つは岡山県です。岡山県の岡山市から総社市にかけての、いわゆる吉備路に伝わる桃太郎伝説。もう一つは、四国の香川県の鬼無。それからもう一つは、愛知県の犬山市。これが三大伝説地なのです。

この桃太郎伝説ができたのは、実を言うと昭和5年です。愛知も高松もここも、ちょうどそういう不況の時代に、どうやったら地域おこしができるかということで、教科書に載っていて、誰でも知っている桃太郎を活用しない方法はないなと考えた。それで地名とか鬼退治の伝説などと結びつけて、わが所が桃太郎だと。そういうことになりますと、その地域の人は、そういう話を聞くだけでも元気が出てくる。それで村おこし、地域おこしをしたのです。

それからすぐ日中戦争、太平洋戦争になりますから、そういうものはなくなってくるのですが、また戦後復活して、また最近の状況は、桃太郎伝説をもう一回生かして、地域の發展のために役立てようという風潮が出ております。昨年、岡山県でも「おかやま桃太郎の会」というものを作りまして、これでもっと地域おこしをやるのではないかと。実は、その桃太郎の会の会長は私なのですが、そういうことでやっているのです。

やはり、その桃太郎の会を作りまして、テレビとか新聞とか雑誌とか、いろいろなところから取材がありました。というのは、やはり今の時代に、それで地域おこしをしようというところに着目をして取材にいっちゃう。取材に来られるというのは、言ってみると国民の皆さんの声が、そういうところに反映しているのではないかなと思うわけです。そのようにして、歴史とか文化とか民俗とか、そういうものも利用して地域おこしをやる。

つい最近も、よく新聞に載りますが、3月3日のひな祭りにおひなさまを飾って観光客を呼び集め、地域を少しでも活性化しようというので成功したのが真庭市の勝山町。それに続いて、今は倉敷市でもやっていますし、これだったらできるというので全国各地に広がったのです。

ただし、おひなさまを飾るというのは家庭で飾るのですね。民俗行事の一つ、それを、みんなから見える表通りにきちんと飾る。立派なものでもなくてもいいのです。そういうものをたくさん飾れば、それで地域おこしができるということでして、そういう意味では、仁徳天皇と黒媛の話のある所では、それを資源として活用するほうが、またいいのではないかと。

商工会の人はどう考えられたかわかりませんが、たぶんそのように考えられて、これで地域おこしになればということで、今回のサミットが開かれることになったのだと思うのです。「地域資源無限大」という、ここに書いてある言葉から言って、当然、この無限大のなかには黒媛の話も入ってくるだろうと思うのです。ですから、これをうまく活用して、総社市を含めて、県内各地にある黒媛伝承地も、どこも栄えてほしいと思います。

そして、そういうものを資源として活用する場合には、何らかの根拠が必要です。何かがないと、いいかげんな話を作っただけでは誰も信じません。黒媛は『古事記』に載っていますよ、日本最古の歴史書のなかに載っていますよということで、そういうものの裏打ちができる。それに、こういう伝説地もありますよ、記念物もありますよと。1300年も前から、この黒媛の話はここに伝わっているのですというように言えばいいのですから、そんなに伝わっているわけではないのですが、そういうように言って根拠にするわけですね。

根拠ができた。そうしたら、これをどう広めるか。小さな範囲内で知らただけでは力になりません。それを広めることが非常に大切だろうと思うのです。先ほども言いましたように、『古事記』とか『日本書紀』というのは、若い人たち、戦後世代の人はあまり読んでいない。そういうなかで広げるというのは、なかなか大変なことだろうと思うのです。今回のサミットも、その一つの手段だろうと思うのですが、どうやって広げるかということですね。そのためにはいろいろなもの、イベントとか広告とかに黒媛を使うという、いろいろなかたちがあると思うのです。

それから、例えば山手なら山手、総社なら総社の黒媛の例で言いますと、これをどういうかたちでアピールするかということも、いろいろな方策があると思います。まず黒媛塚を見ていただく、それから幸山に登っていただく、黒媛の足跡を見ていただくというように、伝説を訪ねる旅とか、そういうパンフレットを作るということも必要でしょう。

そして特産品や土産物の開発というのは、そういうものと絶対に切り離せないと思うのです。例えば「山縣に苧菜摘む」というのが出てきます。苧菜というのは、例えば苧菜をカブだという人もいますけれども、これはタカナとかハクサイのようなものだろうと通説では言われているのですね。それだったら、タカナとかハクサイを作って、これは黒媛菜という名前をつけて道の駅で売ってみたり、黒媛菜の漬けものだと言って売る。そうすれば、名前を変えただけで付加価値がきちんと付くわけですね。

それから物語にしたり、ミュージカルにしたり、芝居にしたり、音楽にしたり。そういうことで、若い人も、それに組みあわせるような宣伝方法をしないといけない。

それから、うちだけだというのではなくて、お互いに玉島の黒崎とも手をつなぐ、勝北の山形とも手をつなぐというように、地域連携を強めてやっていく必要があるのではないかと思います。そのようにして、それをどうアピールしていくかというのが、また重要な課題だろうと思うのです。

これがどれだけ観光や地域の経済に結び付くか。金との関係がない限り、うまく発展しませんから、うまい具合に結び付けてやっていかないといけないと思うのです。

倉敷の駅の裏にできておりましたチボリ公園が、昨年末で閉園になりました。「チボリ公園」と書かれた、たくさんありました道路標識が、南のほうでは幸いなかな、「吉備路」と全部が入れ替えられました。「チボリ」から「吉備路」になったのです。今度は吉備路が本気を出して取り組むべき時期にきたのではないかなと。道路を車で走りながら、あそこにはチボリ公園があったというものが、全部「吉備路」になったのです。ですから、吉備路の人は本気で頑張ってチボリに負けない。短い期間で閉園になるのではなくて、ずっと未来永劫に続くようにがんばっていただきたい。

それだけの資源はあると思うのです。先ほどの市長のごあいさつのなかにもありましたように、これだけの古墳とか、そういう文化財があるというのは、本当に日本でも一位、二位の所です。ですから、そういうものを生かして、そのなかで『古事記』に黒媛というのが出てくるのですから、こういうものも県下の各地でうまく生かして、ぜひとも地域発展のために結び付けていくことができれば、一番いいのではないかと思います。

3時までということですが、始まりが遅かったので、だいぶ端折って猛スピードで話しましたが、これで終わります。大変下手な話で失礼しました。どうも、ご清聴ありがとうございました。

## 資料 黒媛サミット(パネルディスカッション内容)

### パネルディスカッション

コーディネーター	岡山民俗学会名誉理事長	立石 恵利
パネリスト	総社：詩人	なんば・みちこ
	倉敷（玉島黒瀬）吉備路文学館館長	遠藤 堅三
	津山（勝北）津山「風と光と心の劇場」実行委員会監事	今石 一恵
	備前（佐伯）和気町歴史民族資料館学芸員	金城 由佳

立石 どうも大変失礼しました。先ほど下手な話をした者が、またこんな所に座って、今度のパネルディスカッションもうまくいくのかなどと思って心配しております。約1時間ですから、最後まで、よろしくお付き合いのほどお願いしたいと思います。先ほどは「吉備の黒媛」ということで少し話をさせていただいたのですが、今回はパネルディスカッションというより、各地での黒媛にまつわる皆さん方の活動とか、そういうもののご報告を4地区からしていただくことになると思うのです。それが済みますと、だいたい1時間ほど時間がたちまして、後でお互いに討論はしたいのですが、パネルディスカッションをしようと思うと、少なくとも2時間はないとできません。しかし、日程がこうなっていますから、今日はこれでさせていただきますと思います。皆さんのお手元に「古代ロマン 吉備の黒媛サミット」という1枚紙が入っています。そこにプログラムが載っておりまして、3時15分から3時20分からになります。今回は、総社から詩人のなんば・みちこさん、倉敷市の玉島の黒崎から吉備路文学館館長の遠藤堅三さん、津山市の勝北町から「風と光と心の劇場」実行委員会の監事をされていらっしゃる今石一恵さん、それから和気町、昔の佐伯町ですか、和気町歴史民族資料館の金城由佳さんの4人の方に、各地区の実情や取り組み等についてご発表をいただくこととなります。

それぞれの経歴につきましては、その裏面に載っております。一番上は見ないで、なんば・みちこさんの所から下に見ていただければ、それでよくわかりますので。それも本当ですと、私のほうからご紹介しないとイケないのですが、そういう時間もございませんので、お名前だけで進めさせていただきますと思います。

それぞれの方に15分間ずつ実情をお話ししていただくと、総社、倉敷玉島の黒崎、津山市勝北町、それから和気町（佐伯）の順番、なんばさん、遠藤さん、今石さん、金城さんの順番でご報告をしていただきます。もし最後に時間が余りますと、一言ずつ、皆さんに言っていただくことができるとは思いますが、それができるかどうか、その時になってみないとわかりません。では早速ですが、吉備の黒媛にまつわってパネルディスカッション、ご報告を、なんば・みちこさんのほうからよろしく願いいたします。

なんば 皆さま、ご苦労さまでございます。なんばでございます。先ほど、立石先生から、たくさんいいお話がございました。それと一部重なるところも出てくるのではないかと思いますけれども、よろしく願いいたします。

物語についてでございますが、これが『古事記』から出ているということは先ほどお話がございました。『古事記』は、皆さまよくご存じのように、第40代天武天皇が稗田阿禮に命じて、口伝え、口承（こうしょう）と言いますけれども、口承させて、その話を、次の2人の天皇を飛ばしまして、43代元明天皇が太安萬侶に命じて書かせたものであるということ。これは中学校、高校の歴史で、少しご記憶がありがたと思います。

天武天皇は即位されたのが673年で、間に2人の天皇がいらっしゃるのですが、元明天皇は707年の即位でいらっしゃいますから、その間は34年ということになります。稗田阿禮が28歳の時に命を受けられていたので、まだお元気だったから残った話と言えるでしょうか。もう一つ、日本の歴史書として、『古事記』と並ぶ『日本書紀』があります。このことも立石先生がお触れになりましたが、これにも太安萬侶がかかわっているのですね。『日本書紀』は720年に出来上がったので、『古事記』が出来上がって『日本書紀』が出来るまで8年間でございます。

黒媛の話になりますが、『古事記』の仁徳天皇の項に、黒媛と交わした相聞歌とでもいうべき4首と、もう1首ございまして、5首の歌が載っております。そのうちの1首は道中歌、吉備の国に来る途中の歌ということで、これはひょっとして仁徳天皇が別の時に歌った歌ではないのかということでしたので、その中の4首だけを取り上げて、お手元のほうにございます「吉備の黒媛」という、この冊子を作りました。この中に載せております4首は、4首とも解説文を詩の形にさせていただきます、私の想像の世界と思い入れを込めて書いたものでございます。また後で、お暇な時にお読みいただけたら、切ない黒媛の思いなどが受け取っていただけるかと思えます。載っていました4首を、ちょっとだけご紹介したいと思えます。

「沖方（おきへ）には 小船（をぶね）連らく くらざやの まさづ子吾妹（わぎも） 国へ下らす」。これは「沖のほうには船が連なっているよ。あの中に私の愛しい妃もいて、ふるさとへ下っていかれるよ」という歌でございますが、下っていかれたその後、天皇は黒媛のことが忘れられなくて、今日お話にもありましたように、淡路島に行くと偽って吉備の国へ来られます。

そして吉備の国での歌が、「山懸（やまがた）に 蒔（ま）ける 菘菜（あおな）も 吉備人（きびびと）と 共にし採（つ）めば 楽しくもあるか」というものでございます。山懸の説がいろいろございまして、山の方だとも言われたり、いや地名だとも言われているわけですね。内容は「山懸にまいてある青菜も、吉備人とともに摘むと楽しいことだな」。

でも、そんなに長く楽しい時は続きません。やがて別れの時が迫り、黒媛が別れの歌を歌います。「倭方（やまとへ）に 西風（にし）吹き上げて 雲離（ばな）れ 退（そ）き居りとも 我忘れめや」。「大和のほうへ西風が吹き上げて、雲が離れ離れになるように遠く離れても、私はあなたのことを決して忘れません」という意味ですね。

次にまた、「倭方（やまとへ）に 往（ゆ）くは誰（た）が夫（つま） 隠水（こもりづ）の 下（した）延（は）へつつ 往（ゆ）くは誰（た）が夫（つま）」。「つま」というのは「夫」のことですが、ちょっと皮肉も交えて歌っていると思うのです。「大和へほうへお行きになるのは、どなたの夫でしょう。草の下をひっそりと隠れて流れていく水のように去っていかれるのは、誰の夫なのでしょう」。でも、その後に余韻が残っていて、「私の愛しい夫よ、あなたは私の夫ですよ」という気持ちが入められているわけです。とても切ない歌だと思います。

次に黒媛の伝承の地については、立石先生のほうからお話ございましたが、8カ所か9カ所か、岡山県内にございます。これは資料としては、日本文教出版の岡山文庫『吉備の女性』という本の中に出ておりますので、ご覧になりたい方は、また図書館でもお探しいただければ書いてあります。

私は総社市民ですので、次は黒媛の里が総社の山手あたりと思う訳を申し上げたいと思います。まず一つめの理由は、地理的に考えての視点からでございます。仁徳天皇が淡路島經由で来られたということから、瀬戸内海から高梁川をさかのぼって上ってくるのは、とても簡単ではないだろうかと考えます。吉備津という地名、吉備津神社があります所の「津」ですけれども、「津」というのは、やはり海と非常に関係が深いわけですね。そして、この当時は、海が内陸にかなり奥まで入り込んでいたという事実がございますので、これは妥当ではないだろうかと思えます。

また『日本書紀』の上巻の第15代応神天皇の項に、これも立石先生が少し触れられましたけれども、応神天皇は仁徳天皇のすぐ前の天皇でいらっしゃいます。応神天皇の項にある話が、仁徳天皇ととてもよく似た話だというふうに、今おっしゃっていましたが、本当にそうなのです。応神天皇には兄媛(えひめ)というお妃がいたのですけれども、その兄媛が吉備の国の女性だったと。兄媛のあとを慕って吉備の国を訪ねられた部分に、こんな表現があります。

『天皇、便ち、淡路より転りて、吉備に幸して、小豆嶋に遊びたまふ。庚寅に、亦葉田葦守宮に移り居します』と書いてありますね。『日本古典文学大系』の岩波書店のものによりますと、注釈の部分に、葉田は地名、総社市の東部かとなり、葦守は現在の足守と書いてあります。当時は足守あたりまで水位が高く、船で往復できたと思われるのですね。

仁徳天皇の話と応神天皇の話がよく似ているので、同じ話かもしれないとも言われております。太安萬侶が『古事記』の8年後に『日本書紀』を書いたことを考えると、そして太安萬侶が仁徳天皇の項で黒媛との歌を『古事記』にしか載せていないことを考えれば、太安萬侶も、これは口伝の話だから、ひょっとしたら、ごちゃごちゃになっているのではないだろうかと迷っておられたのかも知れないというふうにご考えます。

総社あたりの話ではないかという訳について、2つ目は『古事記』の記述からです。「吉備海部直の娘、名は黒日賣」と書いてあるわけですが、海部(あまべ)というのを辞書で引いてみますと、「海部」とは直轄領の海岸を監視し朝廷に海産物を貢ぎ物とした役職である。そして「直(あたえ)」は名字である。直というのは国造(くにのみやつこ)、世襲制の地方官で、ほぼ1つの郡を持っていた。そういう人の姓に多いとありますね。このことから、海にごく近い場所ではないか。海岸線が近い、あるいは海岸線に沿っている地域が領地の中にあることが条件になるのではないかなと考えたわけでございます。

それから3目でございますが、長く語り継がれた伝説が総社市内に2つあります。1つは、これも立石先生が触れられた部分ですが、現在の「こうもり塚古墳」は、数十年前まで「黒塚塚」と呼ばれて地域の人に親しまれていました。それは古くから、このあたりに黒媛が住んでいたという伝説があって、塚の発見とすぐさま結び付いたのではないだろうかと考えます。ただ、これは残念ながら、造られた時期と黒媛の時代とに100年以上の差があるから、結局のところ、当時その塚にコウモリがたくさん住んでいたため「こうもり塚」となりました。とても味気ない話、味気ない名前になったわけでございます。

2つ目の総社市に残っている伝説は、本居宣長という江戸中期の学者が書いた『古事記伝』に、「山懸の地」について、このように書かれています。「備中などに、この地名はなきにや。国人に尋ぬべし」とあるのですね。国人に、地域の人に尋ねたらわかるのではないかというのです。

なお、「備中の国、都窪郡山手村のこならん」とある記述も他の書物にあります。山手村は福山のふもとにあって、昔、ヤマガタムラと言っていたとは、古い地図に残っていると聞いていますが、これはよう調べておりません。福山の続きの北側に上部の平らな山があって、戦国時代に幸山城があった所ですが、そこに天皇が行幸されたということで幸山(こうざん)、幸いの山と言うのだと言い伝えられています。そして、この幸山で仁徳と黒媛が青菜を摘んだとされているわけです。また『都窪郡誌』というのがあります。大正11年に最初の刊行です。この中に「古事記にあらわれたる山懸(山方)は本村にして、また天皇の御幸したまいし地、幸山というあり」と書いてありますし、『備中名勝考』に「窪屋郡山手を山懸(山方)という」とも載っているのですね。

さて最後に、総社市ではないかという理由でございますが、総社市には古墳が非常にたくさんあります。まだ発掘されていないものが、ざっと2,000基あるのですね。その中には大きな古墳も、まだ調べられておりません。今後の研究がとても楽しみです。私は発見の時には、もう生きておりませんけれども、きっと真実を明かしてくれるものと、とても熱い期待をしているところでございます。

想像と期待が文化を育てる大きな役割を持っていると私は考えておりますので、各地域で想像力を発揮して、いろんな想像をし、そして、ここではなからうかと思うことが、すべて地域の文化の発展に役立っていくと思っておりますので、これからも他の地域の方と手を結びながら、総社市を発展させていきたいな、総社市の発展を願いたいなというふうに思っているところでございます。ちょうど時間となりました。すみません。

立石 ありがとうございます。最後に、なんば先生がおっしゃった「想像と期待が文化を育てる」、そういう意味では黒媛も、やはり想像と期待で大いに育てていきたいと思えます。

では次に、倉敷市玉島の黒崎の件につきまして、吉備路文学館の館長の遠藤堅三さん、よろしく申し上げます。

遠藤 吉備路文学館の遠藤でございます。私は玉島の黒崎の生まれでございます。そういう意味で、この地に伝わる黒媛伝説についてお話をさせていただきたいと思えます。

これからお話しする順序でございますけれども、まず最初に「山懸」という言葉がたくさん出ておりますが、私の場合は、この黒崎ではないかという根拠について、まずお話をしたい。続いて、昔の旅は船旅でございます。そういう意味合いで、黒崎という所は海岸沿いの集落だったと。さらに、その船に乗って黒崎までおいでになった仁徳帝の船は、さて、どこに着いたのか。さらに仁徳帝をお迎えした仮御所はどのあたりなのか。

仁徳天皇と黒媛の物語を連想させる地名が、今でもたくさん残っております。そのあたりをご説明し、さらに青菜を摘んだという黒媛の畑と言われる場所が、今でもございます。さて、そこはどこなのか。最後に、屋守塚というのは幻の古墳でございます。これがどこにあるのか。その屋守塚は黒媛塚ではないだろうか、というようなかたちでお話を進めてまいりたいと思えます。

まず、玉島の黒崎ではないかという根拠でございますが、『古事記』にございます。仁徳天皇が吉備の国に帰る黒媛を詠んだ歌の中に、「沖方には 小船運らく くるざきの まさづ子吾妹 国へ下らす」と、『古事記』には「くるざや」となっておりますけれども、先ほどのなんば先生のお話にもありました本居宣長の『古事記伝』の注釈では、「ざや」でなしに「ざき」ということで解釈していただいております。そういう意味合いで、この「くるざき」というものをよりどころにいたしておりますし、また黒崎の媛ということから黒媛と呼ばれたとも言われております。

昔は、先ほど申し上げましたように、旅は船旅でございます。これは当時の大型船でございますが、大阪市制100周年の際に復元された船でございます。全長11メートル、高さ3メートル、総重量トンとして5トン。このような船が着いたということは、やはり黒崎は海辺でなければならなかったということでございます。

この地図は3世紀ごろ、『古事記』より少し前の時代の想像図でございます。これは四国ではないのです。四国と思われていると思いますが、これが今の児島半島です。このあたりが、今の岡山。ここが倉敷、これが玉島。それで私がお話する黒崎というのは、ここでございます。昔は、これを「吉備の中海」と言っておられました。したがって、仁徳帝のお船は淡路島へ寄り、この海岸沿いを通って吉備の中海に入っていた。そして、この一番西の端っこの黒崎まで船を着けたのではないかと、そのように思っております。ちなみに次が、現在の地図でございます。大ざっぱに申し上げましたら、この山陽本線がございますけれども、この山陽本線より南というのは、このあたりが児島半島で児島ですね。だいたい海が島でしかなかったというのが先ほどとの違いでございます。

現在、ここに水島の工業地帯がございます。その西向かいが玉島黒崎という所、この場所を拡大したのが次の地図です。これが現在の地図でございますけれども、お話の中心にさせていただくのは、このあたりが玉島黒崎の屋守という場所でございます。黒媛伝説は、だいたいここに集中いたしております。確かに、ここは海でございますし、これは皆さんご存じと思いますが、海水浴場で有名な沙美でございます。

これは今、住宅地とか畑になっておりますが、これは江戸時代に塩田のために干拓された土地でございます。ということは、江戸時代より前はどうかだったかということを、次の地図に示しますが、江戸時代より以前というのは、こういうかたちで海が入り組んでいた。これが先ほどの沙美の浜ですね。話の中心がこのあたりでございますが、この入り江から、ずっと細い所を通って、このようなかたちで入り江が入り込んでいた。このあたりは地質学的にも沖積層で、浅瀬ではあったと思いますけれども、少なくとも海の水が入っていた。最近でも、このあたりで井戸をちょっと深く掘りましたら、藻であるとか、モガイの貝殻がたくさん出てくる場所でございます。したがって、ここまで海が入っていたということでございます。

それでは本題に入っていきたいと思えます。淡路島を経て黒崎まで着いた仁徳帝のお船は、さて、どこに着いたのだろう。地元では2カ所言われております。1カ所が、この沙美の海岸よりちょっと東の沙美の東の浜。ここであるとすれば、今から考えたら、陸路で山越えをして、ここまで行くと6キロ近くあるのです。当時6キロの山道を仁徳帝にお渡りいただくというのは、大変無理がございます。私は、地元の人も言われておりますけれども、ここに花畑という場所がございます。このあたりではないかと、ここで降りて、この陸路を通ったか、浅瀬用の船に乗って、このあたりまでおいでになったのではないかなと。

その理由といたしまして、もう一つあるのです。ここに御前(おんざき)神社というのがあります。おんざき神社というのは、この山手にも、たしか「神崎神社」と書いて「おんざき」とお読みになるのだらうと思えますが、この海岸沿いの至る所に「おんざき」という言葉で神社がございます。これは海の守り神でございます。

もう一つ、その御前神社は帆下宮(ほさげのみや)とも言われております。帆下宮というのは、海の航海の安全を祈るために、このお宮のふもとに来たら帆を下げる。したがって帆下宮と言われております。ですから、仁徳帝の船は、この近くまで来て、御前神社のふもとで帆を下げて、このあたりに上陸なさったと私は考えております。

先ほどから、このあたりと申し上げておりますけれども、これはだいたい500～600メートル四方の狭い土地でございます。これからは、この地方について、いろいろなお話をさせていただきたいと思えます。

先ほど申し上げたように、このあたりまで陸路か、あるいは浅瀬船に乗って仁徳帝がお着きになった。ならば、仁徳帝と黒媛のお二人が楽しい時間を過ごした場所は、さて、どこだろうということでございますが、古い書物の文献によりますと、この5つの条件が書かれております。このあたりであったらうと。

結論から言えば、このあたりに新殿を建てられた。その一つとしては、この黒崎に黒瀬神社が今でもございますが、黒瀬神社の東南に位置する、そして丘の中腹である、生活の跡がある。このあたりは新殿に、新殿(にいどの)遺跡と言っておりますけれども、そういう昔からの遺跡がございます。

もう一つは、豆河内(まめがわち)部落が眺望できた。豆河内というのは、このあたりでございます。この場所から左を見たら海があります。左を見ろということ、「左見」、今は「沙美」となっておりますが、左を見たら海がある、そういうかたちになっていると。

これが、その右の新しく館が建てられたであろうという山の中腹でございます。このあたりから眺める景色が次です。これが豆河内地区でございます。さらに、その中腹から立って左をのぞいたら、このあたりは海が見えます。そういう状況になっております。

もう一つ、黒媛神社についてお話を申し上げます。今は黒瀬神社ですけれども、かつては黒媛神社とか、お黒さまと呼んでおりました。この鳥居に注目してください。この鳥居の大きさと、松の大きさ。黒瀬神社のお社は、この中にございます。これが現在の黒瀬神社の鳥居です。今の大きさを見て下さい。これだけのもので、松がこれだけある。惜しむらくは、この松は昭和50年代に枯れておりますが、高さはだいたい30メートル、幹の周りは大人3人がようやく抱えることができるほどの大きな松でございました。いかに、太古の昔からあったとしのばれる大松と黒瀬神社でございます。

今でも黒媛物語を彷彿とさせる地名がたくさん残っております。まず、この黒崎は、今もって黒崎です。大字の屋守という部落でございますが、この屋守というのは黒媛の屋敷を守るという意味合いで、屋守と言われたとも言われております。しかし私が考えるのには、先ほど話がありました、当時、すでに行政府として山守部、海人部という天皇直轄の領地を持って貢ぎ物をさせていたと。その山守部というところから、屋守という名前が付いたのではないかと考えています。

さらに小字になりますと、もっともでございます。先ほど申し上げた500～600メートル四方の地域に、これだけの名前が残っております。まず新しい殿、新しく館を作った場所ということで新殿と書いてありますが、地元ではこれを「にいどん」と読みます。先ほどの写真にも出ましたけれども豆河内。都は当時、河内でございます。このあたりを仁徳帝が散歩中に向かいの景色を眺めたら、「狭いけれど、私の生まれた河内に似ておりますね」というお話から、小さい河内、豆河内というかたちで名前が残っております。

さらに「大内」と書いて「おおち」と読みますけれども、大内というのは都の人が住んでいる場所、宮中の方が住んでいる場所を大内と言います。したがって、仁徳帝のおそばの方々、ここまで一緒に来た方々が、たぶんここにお住まいになっていたのかなど。それ以外に御所田であるとか、大阪の和泉国、この和泉山(いずみやま)という言葉、あるいは黒媛の畑、これだけ狭い中に、これだけのいわれがあるということでございます。

先ほどの黒媛の畑というのが2カ所ございましたが、この1カ所は、この右側が黒瀬神社、黒媛神社とも言われている所のすぐふもとでございます。地元の人は、これを今でも黒媛の畑と言っております。先ほどの「山縣に 蒔ける菘菜も 吉備人と共に採めば 楽しくもあるか」という歌から来ている黒媛の畑です。

もう1カ所は、ちょっとこれだけではわかりづらいでしょうけれども、かつて桃源小学校という学校がございましたが、その山の中腹にございまして、非常に見晴らしのいい場所でございます。今こういうかたちで荒れてはおりますが、地元の人は、ここを黒媛の畑と呼んでおります。

ちょっと時間が迫ってまいりましたので足早にいきます。最後でございますが、黒媛塚。正式には屋守塚と言うのですけれども、この幻の塚を探してみよう。この地区は、先ほどの500～600メートルの範囲に、これだけの遺跡などがございます。古墳は、この新殿古墳と幻の屋守塚。このあたりは全部場所が特定されておりますが、この屋守塚だけは幻でございます。

これが幻の屋守塚でございます。これは昭和の初めに写された写真で記録に残っておりますが、この昭和2年以降、まったく調査もされていなければ、記録もございません。ただし、この写真の添え書きに、先ほど池があったと思いますが、大池の西南方数町の山の中にあるけれど、半分壊されているという表記がございます。それを頼りに、先月27日に、地元の方々とか倉敷市埋蔵文化財センターの専門家の方をお連れして、山の中に入っていました。

「さあ、見つかったんだ」と私は思った。こういう石と、この左側にも少し石組みがあったので、見つかったと思ったのですけれども、専門家のお二方が、どうも首をかしげるのです。「遠藤さん、どうもこの低い場所に古墳があるというのは、とうてい考えられません」というようなお話で、場所的にこれは無理がある。ただし、このご案内いただいた見村さんからは、「かつて大水が出て、山が崩れて、石がどンドン、大きな石も下へ落ちたものもございまして」というような話もございましたので、たぶん、今、見つかった場所よりは、だいぶ上の所かなとは思っております。

今日も関係の方がおいでかまわりませんが、今82歳の道広さんという方のお話を聞きましたら、ご自分が子どものころに、この中でよく遊んだという記憶があると。昭和の10年ぐらいでしょうか。この石とか埋蔵品は、戦後、考古学好きな方が持って帰られて、今はどこにあるかわからない。ただし、これが1メートル60センチぐらいということは記憶なさっているというお話をお聞きしました。

何はともあれ、幻の屋守塚が黒媛塚ではないかとか、どこにあるかとかいうことは、今もって幻でございます。私としましては、こういう古代ロマンへの夢を残して、私のほうの黒媛伝説のお話を終わらせていただきたいと思います。ちょっと時間が超過しまして、申し訳ございません。

立石 遠藤さん、ありがとうございました。倉敷玉島の黒崎の地名を中心にして、わが所こそ黒媛のふるさとだということを、写真も利用して力説されました。

では次は、津山市勝北町のことについて、「風と光と心の劇場」実行委員会の監事をされていらっしゃる今石一恵さん、よろしく願います。

今石 今お二人の先生方から黒媛の古事記に関する部分、又は地理的な説明をお聞きました。そこで私は違った角度から地元勝北の黒媛伝説についての取り組みを話してみたいと思います。立石先生からもご紹介いただきました様に、勝北町は平成17年に津山市に合併をいたしました。

黒媛伝説は海とは切っても切り離すことができない話ですが、今の津山市勝北は海には程遠いといった場所でございます。しかし、物語は古代五世紀頃の話ということもあって昔は津山市勝北のこの地も海だったという想定のもとで黒媛伝説を認識してすすめます。

まず、旧勝北の位置を紹介させていただきます。方角で云うと皆さんに2.3日後戻りしていただきまして、ちょうど今年の恵方、節分(立春)での恵方は東北東の方角だったと思いますが、岡山県の北東部に位置しております。町の中央を東西に国道53号線が横断し、東の端のほうを北から南に向かって日本原の自衛隊駐屯地がございます。

旧勝北町は人口約7,600人という小さな純農村地帯であり、北には中国山地の山々が連なり裾野一帯に古墳が群がり、その一角に水原古墳(通称 黒媛古墳)と呼ばれる古墳が残っております。旧勝北での黒媛塚は新野山形字水原に残っていますが、ここでの「山縣」は山の方(ほう)と書くのでなく形(かたち)と書いて山形と読む読み方の山形でございます。

古墳の発掘調査は昭和12年4月に地元の人の発見により警察の立ち会いのもと調査をしたのですが、昭和13年12月東京の帝国博物館の方へ発掘した陶棺など寄贈するようにと命ぜられ持ち帰られたということです。地元では地元の皆さんが貴重な史料として大切に保存・保管につとめるので残して欲しいと願ったのですが、結局は国への寄贈ということで返していただけなかったという訳でございます。

その後、陶棺の行方はわからなくなっていたのですが、いろいろと調べたところ平成9年2月に博物館の方から貴重な古墳時代の特色を示す遺物であるので修復をして展示をする計画であるとの報告がありました。平成12年12月に東京上野の平成館、現在の皇太子殿下ご成婚記念事業として建築された平成館特別第四室におきまして特別展示をされました。綺麗に修復をして展示してありました陶棺を見てまいりました。皆様のお手元に私達の取り組んでおります事業の報告書をお配りさせていただいていると思いますがその25ページを見ていただきますと完全に修復された陶棺が写真入りで載っていると思います。詳しいことはここに書いてありますので後でご覧下さい。

次に旧勝北町が黒媛伝説から文化のまちづくりの一環として取り組んできた経緯について述べてみます。平成10年4月25日に「ハートピア勝北」と命名いたしました図書館、公民館、文化センター等町の生涯学習の拠点となる諸施設がオープンを致しました。もともと勝北は青年演劇日本一になる等芸術文化が大変盛んな所でございますので、拠点のオープンとともに文化でまちづくりをしようと町民の声が高まってまいりました。



そして、その方向に向いておりました時に、ちょっと見にくいかと思いますが、平成10年4月25日の『山陽新聞』に、「恋文」ということで仁徳天皇のお話が載っておりました。勝北の黒媛塚を意識したのではなく、ここの総社を意識したのだと思いますけれども、私たちも、その仁徳天皇と黒媛のことに注目をして、まちづくりをしようということが盛り上がっておりましたので、どこよりも行動を起こすことが一番だと。今日は市長さんがいませんけれども、よそよりも後になるとやる気がなくなるので、早くスタートしようということで、この新聞記事に自分たちの心が発せられまして、より盛り上がりが強くなり旧勝北に残る歴史、文化、伝説などから題材を得てより多くの町民の参画が得やすいミュージカルの手法で黒媛伝説に決まりました。

そして、いろいろと議論があったのですけれども、そう決めましてから、地域の皆さん方と一緒に頑張ってきた経緯が映像でございます。私がここでお話をするよりも、本当は50分の記録なのですけれども、7分にまとめたDVDを持ってきておりますので、その取り組みついて、皆さんにご覧いただきたいと思っております。お願いします。

(VTR 7分間)

あまり短くしているのも、もう少し皆さんには見ていただきたい部分があるのですけれども、今日はこのあたりでやめたいと思っております。まだまだお話ししたいことはたくさんありますけれども、時間がまいっております。

最後に、仙道監督が言っておりましたように、私たちは生涯学習として、そして文化活動の集大成として、このミュージカルを作ってまいりました。最終的には、このミュージカルは公演をすることが目的ではなくて、作り上げていくことが目的である、ということは、地域づくりであり、そして作り上げていくことが人づくりである。そういう観点のもとに頑張ってきました。

そして、これを立ち上げてから今年で10年、黒媛だけでは、という皆さんの声もありまして、今年は第3作目、チラシがあったと思っておりますけれども、皆さんには行き渡っていないかと思いますが、3月1日に『銀河鉄道の夜(津山編)』を、この実行委員会で催しております。それから、子どもたちの出番が少ないということで、青少年健全育成の面からも、子どもたちにも『オズの魔法使い』、このミュージカルも頑張ってきてきました。そして、子どもたちには来年の3月13日、ちょっと気が早いのですが、『ヘンゼルとグレーテル』のミュージカルを企画して、これから頑張っていこうと思っております。

どうぞ皆さん、また一度、3月1日、来年の3月、勝北へおいでください。そして、また皆さん方と仲良くしていきたいと思っておりますので、よろしく願いいたします。ご清聴ありがとうございました。

立石 今石さん、ありがとうございました。勝北町のミュージカル『黒媛物語』を中心にして、地域づくり、人づくりで頑張っていくという報告をいただきました。

では最後になりますが、和気町歴史民俗資料館の金城由佳さん、佐伯町に伝わる黒媛伝説を中心にしてお話をさせていただきます。よろしく願いいたします。

金城 失礼します。こんにちは。私は和気町歴史民俗資料館で学芸員をしております、金城と申します。よろしく願いいたします。

私がいま和気町は、岡山県の地図で言いますと、こちらになります。和気町を拡大しますと、このようになっておまして、岡山の三大河川の一つであります吉井川は、このように流れております。

私が今から申し上げます佐伯という地区は、平成18年まで佐伯町として独立していたのですが、平成18年より和気町と合併いたしました。現在こういうかたちになっております。佐伯町としましては、だいたい町の北部になりまして、なかでも、このたび取り上げます黒媛物語の関係があるのは、この吉井川が大きく西にうねっております、このあたりになります。こんな感じのところですね。

だいたい関係があるのは、この赤いポインターが示しております南山方という地区、北山方という南山方の北にあります地区です。皆さんは、もうお気づきかと思うのですが、この「山縣」という地名が入っている時点で、黒媛と関係させたいという感じなのですけれども、先ほど立石先生も、物語を派生していくには証拠品がいるとおっしゃっておりましたので、佐伯南りの証拠品を提示していきたくと思っております。

和気町の北山方よりこちら側、川を挟んで向かいの平地の地区に米澤という場所がありまして、ここに宇佐八幡宮という神社があります。宇佐八幡宮に伝わる縁起に『神村山(みわむらやま)縁起』というのがありますけれども、そこに黒媛に関する記述があります。

見ていくと「海部直黒媛は、吉備海部直、海方の娘なり」。それで、先ほど皆さんがおっしゃっておられます黒媛物語の話が続いていくのですけれども、焼きもちに耐えきれなくなって吉備に帰ってくと、「天皇すなわち神村山に御幸て、天地の大御神に崇め奉り」という一文が続いていきます。つまり、天皇は黒媛を追いかけて吉備の地にやってくるのですが、その時に神村山で黒媛に会いたいよというふうにお祈りをするらしいですね。

それで続きまして、結局、黒媛と会うわけなのですけれども、山方に仮宮、仮の家を作って、黒媛とともに菜々葉を摘んで歌を歌ったとあるのですが、『神村山縁起』に出てきます黒媛物語には、このように小さく「仮宮を営んだ山方が、今、和気郡山方里なりすなわち天皇社」と書いてあります。この「神村山」という共通のキーワード、それから「山方」という地名、「天皇社」が、佐伯の山方が黒媛伝説と関係のある土地であるという証拠品になります。

まず「天皇社」という所から見っていきますと、やはり天皇社というものがあまして、先ほど見ていただいた北山方の金田という地区に、素盞鳴(すさのお)神社というのがありました。大正3年に合祀されて、現在の素盞鳴神社と呼ばれておまして、それまでは金田という地区に元の素盞鳴神社があったということですが、現在、拝殿があったと思われる遺構と、本殿と思われる祠(ほこら)、これが「天照大神」と書いてある石碑なのですが、そういったものとか、ちょっと私にはわからない石が立っていて、地元の方には「天皇さま」と呼ばれております。これが『神村山縁起』に出てくる、仁徳天皇さんが黒媛さんとデートするために作った仮の宮である、天皇社であると推定できます。

先ほど素盞鳴神社は大正3年に合祀されたとして申し上げたのですけれども、ここで、先ほど示しました南山方にある畑宮さまと、天津神社さんと合祀されたのです。やはり畑宮さまと天津神社の跡が南山方に残っておりまして、こういった石の塊と、天津神社の跡ですよというような石碑が建っております。

畑宮さまですけれども、地元の方にお聞きしますと「畑のゴウ」とも呼ばれていたらしくて、「ゴウというのは墓という意味じゃ」と教えられまして、黒媛のお墓なのではないかという説が残っているそうです。それから、畑宮さまの別名が「畑岡陵(はたおかりょう)」と言いまして、天皇さまとか皇族関係の方のお墓に「陵」と付きますので、やはり黒媛のお墓ではないかと言われていて、それも関係するかなと思っております。

また、一番最初にご紹介しました米澤の宇佐八幡宮も、神村山にあったという事実以外に黒媛と関係するものがあります。宇佐八幡宮さんは、境内に、こういう末社がいろいろまつられていて、その末社は今はないのですけれども、神村山にあったころには黒媛神社という末社があったと言われているそうです。

それから宇佐八幡宮さんは、境内にこういう、私は井戸だなと思って写真を撮ったのですが、こういう井戸がたくさんあって、その中に黒媛井と呼ばれる井戸があったと言われているそうです。どちらも今は不明なのですけれども、

ちなみに、その黒媛井というのは、旧佐伯町の7つの井戸の1つに数えられていたということで、ほかに父井、母井、黒媛井、壬生井(みぶい)、真名井(まない)、陰石井(かげいしい)、中嶋井(なかしまい)というのがあったそうです。私ども和気町は和気清麻呂で有名かと思うのですけれども、すごく地の利の話で申し訳ないですが、この父井と母井というのは、清麻呂さんの生まれた時に産湯として使った井戸と言われておりまして、そういういわれのある井戸を集めた佐伯の七井に、黒媛も入っているということです。

そういういろいろな関係が言われている佐伯町ですけれども、まちおこしの一環として、「黒媛」というキーワードを使った「黒媛まつり」が、かつて開催されておりました。こちらは佐伯町商工会青年部の方々が、もともとは吉井川のほとりで「どんでん祭」というのを20年ぐらい行っていたそうで、過疎化していったりする村をどんでん返してやろうという意味だったと聞いているのですが、マンネリ化を迎えたと。

それで、地域の活性のためですか、近隣市町村、都市圏との交流を促進するため、総社吉備路商工会さんも同じような思いでいらっしゃると思うのですけれども、そういう気持ちと、「わしらのところに黒媛が関係ありそうじゃ」ということで、平成8年から「黒媛まつり」をスタートしまして、こういうふうにはチラシも出してやっていたみたいです。みたいというのは、私はそのころはいなかったものから。

「黒媛まつり」ということで、毎年、黒媛さんをオーディションして、こういった女性の方を黒媛として1人選ばれてきて、ステージを用意して。どこでやっていたかという、やはり山方の地でデートしたろうということ、南山方にありますリゾート施設、現在の「三保高原スポーツ&リゾート」、当時は佐伯ファミリーパークという所だったのですけれども、そこでステージを行って発表したりしていました。こういう風車があって、いい所なのですけれども、

ちびっこ相撲とかを行ったり、それこそ勝北町さんのように自分たちで劇を作って演じたり、そういうふうにして盛り上がっていたらしいのですけれども、和気町と合併をしてしまいまして、これまた和気町の目玉であります「藤まつり」の季節と時期が重なっているということで、なくなってしまう。

第9回までで終わってしまって残念なことです、やはり「黒媛まつり」の存在もあって、小中学生の皆さんも知るところとなったということで、黒媛伝説の本拠地がどこであるかは、あまり考えないほうが、県内各地が潤うのかなというふうに個人的に考えました。私の発表は以上です。ありがとうございました。

立石 ありがとうございました。金城さんのほうから、和気町の佐伯に伝わる黒媛伝説と、それをもとに作られた黒媛祭の様子等をご発表いただきました。

4人の方にご発表をいただきまして、本当はもう一言ずつ、ご発言をしていただきたいのですが、時間が押しておりますので、これでパネルの皆さん方のご発言は終わりにしたいと思います。

4人の皆さんがそれぞれ、自分の地域と黒媛のかかわりや、その黒媛の伝説を生かして、まちづくりに取り組んでいらっしゃる様子がよくわかりました。どこが黒媛の本拠地かということは、お互いにこれからも大いに争っていただいて、争うことが、また大きく盛り上がることになりますから、みんな想像をたくましくして、この地域をこれからも豊かな地域にしようということで頑張ってくださいと思います。

今日ご発言していただいた方、大変ありがとうございました。それから、今日はたくさんの方に来ていただきまして、皆さんと一緒に、この黒媛も生かして、本当に住みよい地域づくりを頑張ってくださいませうではございませんか。

大変下手な司会ですが、これをもちましてパネルディスカッションを終わりたいと思います。どうもご協力をありがとうございました。

発 行

編 集 総社吉備路商工会

発行日 平成21年2月28日

責任者 事務局長 熊城秀樹

地域資源 全国展開事業

\* 本書の無断転載を禁ず

尚、記載の個人情報については、本講義抄録以外には使用しないものとする。

本書内の写真は岡山県観光連盟、総社商工会議所のホームページから引用しました。